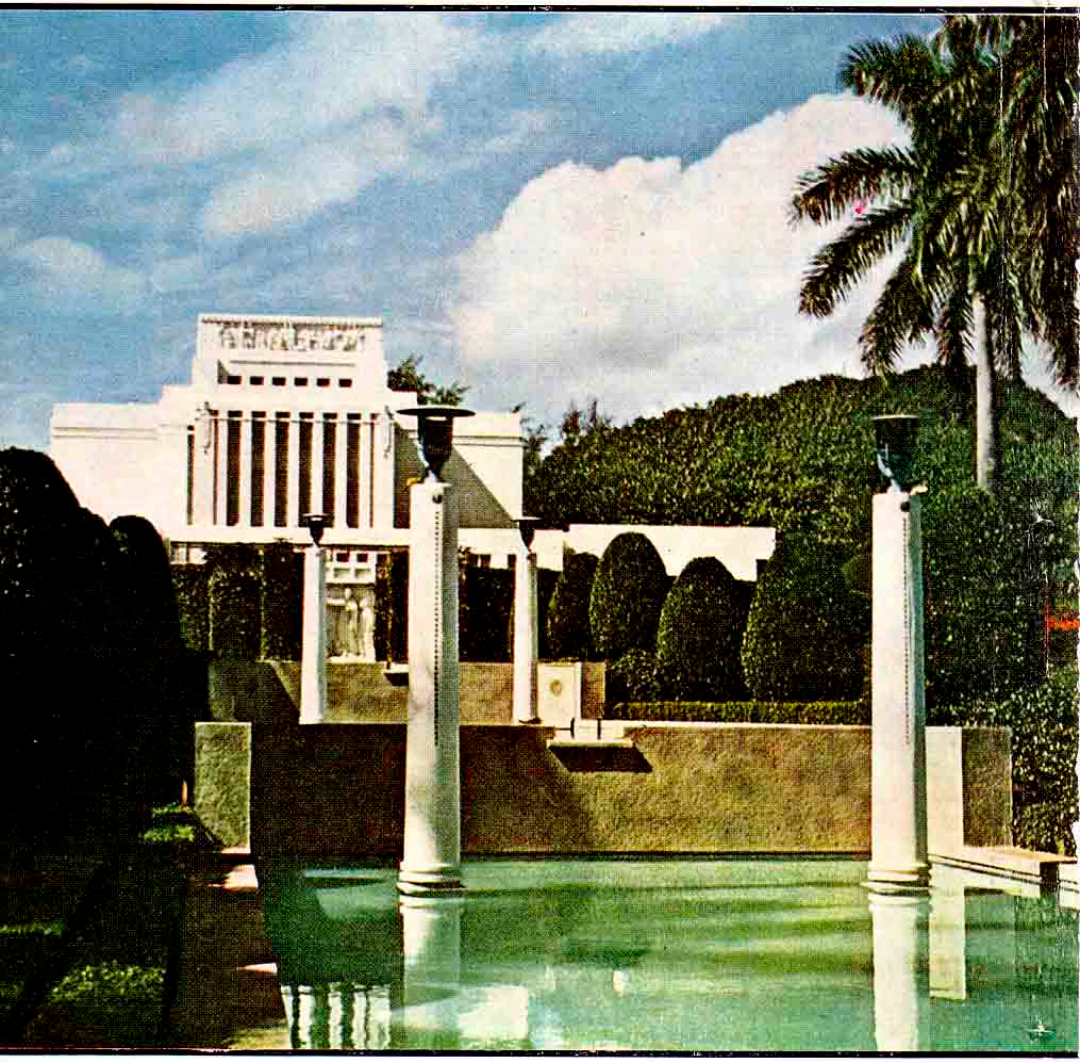
聖徒の道

SEITO-NO-MICHI

一九五八年三月十七日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
第六巻第十号　一九六二年十月一日発行



10　1962

末日聖徒イエス・キリスト教会

The Seito no Michi

Volume 6, October 1962, Number 10

In this Issue

A Prophet's Voice: Our Missionary Corps ..... President David O. McKay ... 581

President's Message ..... President Dwayne N. Andersen ... 584

Mormon Doctrine(34): Priesthood Organization(1) ..... Brother Tatsui Sato ... 587

Your Question: What of the Witch of Endor and Samuel
..... President Joseph Fielding Smith ... 592

Lectures on Faith (at Kirtland, Ohio) (1) 597

A Bible Seminar (1) ..... (at Tokyo Central Branch) 600

Branch News 604

Fukuoka, Nishinomiya, Okamachi, Nagoya, Tokyo South

Aaronic Priesthood: Branch Teaching Lesson (for October) 609

A Letter to an Investigator (2) 610

Church Articles 612

Sunday School Guide for J. S. S. Children (for November)

Sunday School Guide (for November)

MIA Leader (for November)

Mission Headquarter News 624

Essentials in Church History (34) ..... President Joseph Fielding Smith ... 625

Mission Mother's Message ..... Sister Peggy H. Andersen ... 627

Relief Society Lessons 630

Literature — Theology — Visiting Teacher Message — Work Meeting

Social Science

GOSPEL IN ENGLISH (for studying Gospel in English) 644

聖　徒　の　道

第 6 巻
第 10 号

汝
神の心を
心とすべし
さらば
神のもちたもう
あらゆるものは
汝に
与えられん

10 月号

目次　聖徒の道　一九六二年十月号

予言者のことば
わが教会の宣教師団　大管長　デビド・O・マッケイ……581
伝道部長メッセージ　ダワエン・N・アンダーセン……584
質疑応答
エンドルの口寄せがサムエルを呼び起したのはどういうことか　ジョセフ・フィールディング・スミス長老……592
モルモンの教義（三十四）
神権者の組織（伝道部に於ける神権定員会）(一)　佐藤龍猪……587
信仰講話　信仰の本質・目的・効果を説く……598
求道者のみなさんへ
ある求道者への手紙(二)……610

ある聖研（聖書研究会）より……601
ルカ伝十四章　安息日の問題、その他
末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粋
ジョセフ・フィールディング・スミス著……625
アロン神権　ブランチ・ティーチング・レッスン……609
子供日曜学校ガイド（十一月用）……610
日曜学校ガイド（十一月用）……612
MIAリーダー（十一月用）……614
伝道部長夫人メッセージ
ペギー・ヒュイシ・アンダーセン……627
母親ルシイ・マック・スミスの語る
ジョセフ・スミスの生涯……630
扶助協会レッスン……633
神学、社会科学、訪問教師のメッセージ、仕事会
英会話用テキスト―英語の福音……644
支部だより―福岡、西の宮、岡町、名古屋、東京南……604

予言者のことば

わが教会の宣教師団

大管長　デビド・O・マッケイ

一般に言って、末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師は次のような種類にわけることができる。

第一は、わが教会の組織されたワード部もしくは支部に属する男子あるいは女子の会員であって、わが教会の大幹部から召しをうけ、それぞれの職をはなれて二年、三年もしくはそれ以上の間、世界中に樹立されているわが教会の伝道部の一つにおいてもっぱら福音を宣べ伝えるはたらきに従事する人々である。

第二は、組織されたステーキ部に属していない男子もしくは女子の会員であって、伝道部長から召しをうけてとくに任命され、正規の宣教師たちと一しょになって伝道に従事する人々である。これらの人々もまた日々の職をはなれ、伝道のために要する費用を自ら支払って、伝道部で道を伝えるほかの人々と全く同じように忠実にはたらくのである。

たいていこれらの青年男女は、教会の代表者として出て行く指令をうけた人々であり、また経済団体にせよ宗教団体にせよ、一つの団体を代表する代表者は少くとも一つのいちじるしい性質、すなわち信頼することができるという性質をもっていなければならないと

言われている。「人に信頼されるというのは、人に愛されるというよりも一段上の賛辞である」とは正に至言である。

而して、これらの宣教師は誰の代表者であるか。一に、これらの宣教師は自分らが僕べとして仕える主イエス・キリストの代表者である。これらの使節の一人一人は、正に使節という名にはずかしくない人々であるが、これらの宣教師の群を代表しており、その代表をするに当っては自分たちの生涯のうちの最も大きな責任の一つを負うのである。

二に、これらの宣教師は教会、とくにそれぞれの属するワード部もしくは支部の代表者である。

三に、これらの宣教師は各自の両親の代表者であって、両親の名前をはずかしめないという重責を負っている。

今われわれは若い人々におよぼす宣教師制度の有益な影響をちょっとのぞいてみよう、自分が宣教師になるときを待ちのぞんでいるわが教会の執事、教師、祭司たちおよび長老たちは一人のこらず、イエス・キリストの教会を代表する者となるためには、常に節制を重んじその身を清く保たなければならないということをよく知っている。

第三に属する人々は、職業に従事しながら自分の属しているステーキ部もしくは伝道部にあって余暇を宣教師のはたらきにささげている「非専任宣教師」の人々である。

以上の人々はすべて、一度宣教師として召されるときには、宣教師になるよう推薦された者がごくまれに辞退することがあっても、現在それぞれのもっている責任や事情がどうあろうとも、みな昔サムエルが答えたように「しもべは聞きます……お話し下さい」と言うのが常である（サムエル記上、三〇十参照）。

真のキリスト教は愛の実行である。あなたがたの隣り人に、自分のことをわすれて愛を示すことが、神に対する愛を示す最もよい方法である。これが宣教師のはたらきの精神である。わが教会の宣教師たちは愛の精神をもって行き、自分たちの派遣されるどの国民からも何ものをも求めていない。すなわち自分に対する歓呼の声を何ら期待することなく、また何ら金銭的利益を得ようとしていない。

以上三つの種類の宣教師のはたらきは注意深く書きとめ記録をされる。すなわち、出席したいろいろの集会、ほかの人々とかわした会話、くばったトラクトの数、売った書籍の数などはみな総括される。そして、各自がはたらきに費やした一時間ごとに名誉を与えられる。

しかしながら、ここに第四の種類の宣教師たちがいる。この人々の名前は宣教師の名簿にのっていない。この人々が、教会と主なる神のみわざのためにはたらく時間はほとんど数えられることがない。この人々の親切な努力はほとんど報告されない。それでも、これらの人々は教会が成長しているあらゆる所にいるのである。

福音を日常生活の一部分にしている人はあなたである。ただ単に善い隣り人となることによって、教会のためにまたあなた自身のために、友だちをつくる方法を心得ている人はあなたである。まったく、あなたたちはみな宣教師ではないか、しかも「専任の宣教師」ではないか。

宣教師たちがその身を清く保ち、世の罪に染まぬかぎり、今日彼らがどこに在ろうとも、神よ彼らをめぐみたまえ、彼らは神のしもべたちなれば。

私はあなたがたに証詞する。主のみたまは今宣教師たちを導き、彼らの若いうちに彼らを大いならしめ、イエス・キリストの福音を宣べ伝えるための一勢力となしたもうていることを。

伝道部長メッセージ

伝道部長
ダワエン・N・アンダーセン

神さまはあなたの助けを必要としていらっしゃいます。神さまはその助けを唯今必要としていらっしゃいます。主なる神さまは「完全な神の御国」を与えて日本と沖縄とを祝福したいと思っておいでになります。あなたは神権をもっていますか。あなたの兄弟、夫、もしくはお父さんは神権者ですか。「神の御国」は、神さまのために「神の御国」を完全に運営するに足るほど充分に神権者があるとき、はじめてそれができるのであります。極東にはまだ充分の神権者がありません。

今年七月の統計報告をみて私は意外な事実におどろきました。男の会員の六十二パーセントがまだ神権をもっていません。すなわち五百九十九人のアロン神権者、百五十七人のメルケゼデク神権者に対して千百九十五人の男の会員はまだ神権をもっていません。私たちはこの数字をできるだけ早く変えなくてはなりません。

あなたがたは神権の大切なことを本当に理解していますか。少しの間、私と一しょに或るおどろくべき事について考えて下さい。千八百二十九年の五月から六月にかけての間に、主なる神さまはジョセフ・スミスを通してアロン神権とメルケゼデク神権とを回復なさいました。神さまの言葉によれば、この二つの神権は「最後の神権時代」に「神の御国」がたてられる前にぜひとも必要な権能でありました。この神権は、人間に神の御名によって事を行う権能を授けました。この神権によって「末日聖徒イエス・キリスト教会」を組織して設立する権能が神のみもとからジョセフ・スミスに与えられました。この神権の力によって「おどろくべき不思議なわざ」がこれまで成就されています。そしてこの「おどろくべき不思議なわ

ざ」は今や全世界の人々の心の中にあらわれようとしています。かってジョセフ・スミスに授けられた神権は、現在にいたるまでひきつづきこの地上にあります。この神権こそ日本と沖縄に「神の御国」をたてるのに必要なものであります。しかしながら、手もとにある記録をしらべたり各地方部を訪問したりしますと、私は神権の中にある大きな力が現実に利用されていないことがわかります。これは教会員の方々が、神権の目的と各々の生活における神権の重要性とに充分気づいていないからにちがいありません。神権の祝福に関する主なる神さまのみことばを読んで下さい。

「およそ忠実にしてわが今語れる二つの神権を得、而してその天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは、「みたま」により聖められてその肉体再新さる。これらの者はモーセの息子たちとなり、アロンの息子たちとなり、アブラハムの子孫となり、また教会員にして王国の民となり神の選民となる。主は言う、またすべてこの神権を受け入るる者は、われを受くるなり。そは、わが僕らを受け入るる者はわれを受くればなり。また、われを受け入るる者はわが父を受くるなり。而して、わが父を受け入るる者はわが父の王国を受くるなり。この故にわが父のもてるすべては彼に与えらるべし。而してこはこの神権につける誓詞と誓約とによりて然るなり。この故にこの神権を受くる者は、すべてわが父のこの誓詞と誓約とを受け、而してこれをわが父は破ることも変えることもなしたもうはずなし」（教義と聖約八十四〇三十三―四十）。

まことに主なる神さまの約束は大した約束ではありませんか。天にまします父なる神さまは、このすばらしい神権を十二才以上の男子の会員には誰にも授けて下さいます。それで私たちには二つの責任があります。一つはすなわち私たちが神権者の誓詞と誓約を結ぶに足るほど立派な人になる準備をすることであり、二つはほかの人々もこれと同じ祝福を授けられる準備をするように力を借すことであります。

神権は選ばれたわずかな人たちのためにとっておいてあるものではありません。神権は正しい生活を送ることによって得られるものです。バプテスマを受けて教会へ入ってくる若い男の人々は、バプテスマを受けてから一ケ月くらいのうちに神権が授けられるよう、宣教師と支部長について準備をしなくてはなりません。また各支部においても、現在神権をもっていない兄弟たちをよせあつめて、神権者の誓詞と誓約を結ぶに足る立派な会員になる準備をさせるべきであります。若い会員の方々よ、また年配の会員の方々よ、神権を帯びるに足る立派な会員となるにはどうしたらよいか、あなたの支部の指導者たちにたずねて下さい。

執事、数師、祭司等の職があるアロン神権は、メルケゼデク神権を受けるための責任と忠誠とを若い男子の会員が身につけるためにおかれたものであります。アロン神権者は物質的のことをとり行い、メルケゼデク神権者は霊に関することをとり行います。

神権の力を向上させる人々の生活においては、神権が偉大な力をあらわします。神権は神の力でありますから、神権は今日地球上における最大の力であります。しかし、ただ神権をもっているだけでは何の力も得られません。神権の力は、人が神権を忠実に行いにあらわすに従って強くなるのであります。福音の教え、たとえばいろいろの集会に出席すること、誠実に什分の一を納めること、ほかの人々に奉仕をすること、知恵の言葉を守ること、純潔な生活を送る

ことなどは、神権の力を向上させるためにまず第一に守らなければならないことであります。神権の力を向上させようと誠実に心がけている人は、神権を行いにあらわすことのできるいろいろの活動を熱心にいたします。神権を正しく使って向上させるに最もよい導きを与えて主なる神さまは次のように仰せになりました。

「そは人々の心甚しくこの世につけるものの上にあり唯々人間のほまれを得ることをのみ望み、次の如き一つの戒めを知らざるによる。曰く、神権の権能は天の能力と固く結びつきて離るべからざるものにして、天の能力は正義の原則によりてのみ支配し運用し得るものなり、と。この権能のわれらに与えらるる事もあらんは真実なり。されどもし己が罪をおおいかくさんとし、われらの高慢、空しき野望をみたさんと企て、またいくぶんにても正しからざることによりて人の子らを支配し、統御し、強制せんとする時は、見よ諸天は退き去り主の「みたま」悲しむ。主の「みたま」退き去らば、神権またはその人の権威は終りなり。

われら悲しむべき経験によりこの事を知る。およそほとんどすべての人間は、少しばかりの権威を得たりと思うや、たちまち正しからざる支配を始めんとする生れつきの性癖あり。これすなわち召さるる者は多けれども選ばるる者少き所以なり。如何なる権力も勢力も、神権によりて維持する能わず、また維持すべきものにあらず、ただ説服と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛とによる。また親切と浄き知識すなわち偽善にあらず奸智にあらずしてその人を甚だ大いならしむるものによる。すなわち聖霊に感動しては機にのぞみてはげしく人を責む。然る後、また彼の汝を敵視せざらんために責めたるその人に一層の愛を示す。かくて彼は汝の誠実は死のきずなよりも強きことを知るべし」（教義と聖約百二十一〇三十五―三十七、三十九―四十三）。

この伝道部の支部や地方部が発展すると共に、私たちは立派な忠実な神権者のある必要を痛切に感じます。そしてこの必要は今各地に教会堂を建て始めて、将来ワード部やステーキ部ができるための準備をしていますからいよいよ切実になるにちがいありません。

日本の人々がすべてこの挑戦に喜んで応じるように、また十二才以上の男子会員がすべて前に述べた二つの神権を身につけるように努め、父なる神さまのもちたもうすべてのものを得るために自己の召しを完全に果たすように心からお祈りいたします。

（596頁から続く）

お互いの姿をあらわすこともあるが、それは必らず神の定めたもうた律法と秩序によらなければならない。その律法を守ることによって、また神を知らず神の福音を守らない人々と交わらないことによって、末日聖徒たちは悪魔のたくみなあざむきにかからず、多くの悲しみをまぬかれ、永遠の父なる神から流れ出る光明と霊感と啓示とをいよいよ多く受けることができるにちがいない。

（インプルーヴメントエラ誌一九六二年八月号）

モルモンの教義（三十四）

「神権者の組織」（伝道部に於ける神権定員会）㈠

「教義と聖約」第百七章

佐藤龍猪

一、神権者計画（Priesthood Program）の目的。

メルケゼデク神権の保有者はどこに住んでいてもすべて「定員会」（quorum）か「ユニット」（unit）かどちらかの組織に属さなくてはならない。

教会の「神権者計画」の目的を達成するために、会員（男子）が教会の後援するいろいろの活動に加わるようあらゆる努力を必要とする。その目的とは、

㈠全人類に福音を宣べ伝える宣教師の働らきをすること。

㈡会員が信仰を固め誠命を行い、「神の御国」である教会を強くするように助力を与えること。

㈢系図の探求を行い、神殿の儀式の準備をして死者の救いにそなえること、である。

以上の目的を達するために神権者組織の役員たちは次のような助力をしなくてはならない。すなわち、

㈠会員たちが福音の研究をするようにはげましを与える。

㈡教会のために奉仕をするいろいろな機会を与える。

㈢すべての会員とその家族に物質上の助けを与え、また知恵と霊性が発達するように助けを与える。

㈣社交活動、運動競技そのほかのグループ活動を通じて、すべての会員に会員同志の協力と友愛とを与える。

二、神権者組織の管理。

「中央神権管理委員会」がすべての神権者組織の指導管理を行う。伝道部には、伝道部長を委員長とし伝道部書記を委員会の書記とする「伝道部神権委員会」が組織されるはずである。そのほかの委員は、必要なら副伝道部長、地方部長、定員会の会長たちから任命することができる。

伝道部ではふつう大祭司および「七十人」の按手聖任は行わない。例外として、大管長会の承認を得て行うことがある。

伝道部に「七十人」が所属しているときには、伝道部の「七十人」定員会もしくは「ユニット」は、伝道部長会を通じて「七十人最高評議員会」の直接指揮を受ける。「七十人」定員会を組織しようとするときは大管長会の許可を受けなくてはならない。大祭司定員会および長老定員会を組織するときも、これと同じく大管長会の許可を受けなくてはな

らない。

三、支部に於ける神権者の活動。

メルケゼデク神権定員会および「グループ」は伝道部組織であるから、支部長会はメルケゼデク神権定員会および「グループ」を管理する権能をもっていない。支部長会は、各々の支部に属するメルケゼデク神権者を支部の会員として管理する権能をもっている。従って、支部長会は各自の支部のメルケゼデク神権保有者を召して支部内の働らきを割り当てることはできる。

支部長会は忠実な祭司を長老に昇進させるように推薦し、また候補者が昇進に値する資格をもっていることを証明することができる。しかし按手聖任を行う決定権は伝道部長にある。

メルケゼデク神権者は、ほかの任務を割り当てられていないなら、毎週定期に開かれる支部神権会に出席するはずである。

四、メルケゼデク神権の按手聖任。

メルケゼデク神権に按手聖任されるよう推薦を受ける男子会員は次の資格を具えていなくてはならない。

(一)回復されたイエス・キリストの福音が真理であること、予言者ジョセフ・スミスの使命がイエス・キリストの福音と神の教会との回復であったことをまごころから信じ、現在の大管長が生ける「神の予言者」であることを支持し、また教会の大幹部、伝道部長会、地方部長会、支部長会の役員がそれぞれ義しく召された人々であることを支持する。

(二)「神の御国」である教会を地上に立て、福音が真理であることを地上に宣べ伝えるために、自己の才能、財産および能力等を利用したいとねがう。

(三)純潔に身を保ち、誠実であって神権者に按手聖任されるにふさわしいこと。

(四)教会のおきて、教義に反する行動をする団体もしくは個人と親密な関係をもっていないこと。まず第一に教会に対して忠誠でなくてはならない。

(五)家庭の生活が仲よく幸福に営まれていること。

(六)教会員としての義務を熱心に勤め、教会の教義と規則に従った生活をし、「什分の一」を完納し、知恵の言葉を守り、聖餐式、神権会、そのほかの集会に出席し、神権者の行うべきことを活潑に行うこと。

五、按手聖任の手つづき。

伝道部にあっては、支部長が資格のある男子の会員をメルケゼデク神権者に按手聖任されるよう指名することができる。長老（メルケゼデク神権の中の一つの職）に聖任する提案を受けた男子の会員は、地方部長会々員の面接を受け「神権昇進推薦書」の裏面にある諸条項を満足するかどうか記入される。次に伝道部長が面接を行って承認をきめ、終りに地方部大会の神権会もしくは一般大会に於て支持を受ける。

長老の職に按手聖任することは伝道部長の指図によって行われる。

六、地方部神権会。

「地方部神権会」は「地方部神権指導者会」のあとで一年に四回（三ケ月毎に一回）開かれる。「地方部神権会」に出席するはずの者は、アロン神権者ならびにメルケゼデク神権者および神権をもっていない男子の会員たちである。この神権会で、出席者たちは神権者の義務と責任とを教わり、自己の召しを充分に尽すようはげまされ、信仰を固め、誠命を守る力を強める。

この神権会で行われる地方部の事務の一つは、長老の職に按手聖任される人々の名前を提出して会員の賛成を求めることである。

「地方部神権指導者会」は地方部大会に関連して開くこともでき、この際神権指導者たちは各自の義務について教わる正式の機会をもつことができる。

この指導者会に出席するはずの人々は伝道部長、副伝道部長、地方部長会々員および地方部書記、地方部評議員会、定員会々長会、「ユニット」の指導者、「グループリーダー」、メルケゼデク神権定員会および「ユニット」のクラスの教師、支部長会々員および支部書記、二十一才以下のアロン神権者のための「監督」および定員会顧問、二十一才以上のアロン神権者のための「監督」、グループ顧問および各プログラムの教師等である。

この指導者会に於ては、できるなら三つの部会にわかれて集る。

㈠メルケゼデク神権部会。地方部長が補助となって伝道部長が司会をする。出席者は定員会の会長会および「グループリーダー」、書記等。

㈡アロン神権部会（二十一才以上のアロン神権者および二十一才以上で神権のない男子会員のため）。

地方部長会々員、もしくは伝道部委員会でこの部門の仕事をしている代表者が補助となって第一副伝道部長が司会をする。出席者は支部および地方部に於てこの部門の仕事に関係のある方面の指導者全部。

㈢アロン神権部会（二十一才以下のアロン神権者のため）。伝道部委員会の代表者もしくは地方部長会の会員が司会をする。出席者は支部および地方部に於けるこの部門の仕事の指導者全部。

七、メルケゼデク神権部会で考慮される条項

(1)「メルケゼデク神権の手引き」の内容を研究する。

(2)インプルーヴメントエラ誌「メルケゼデク神権欄」の記事で伝道部に関係のあるところを研究する。

(3)この「手引き」で推賞しているようなとくべつな定員会計画を立案したり提案したりする。そのとくべつな計画とは「福祉復興計画」の内容であり、また社交活動やレクリエーション活動にも関係をもっている計画である。

(4)神権者の執り行う儀式の正しい執行方法を教える。

(5)宣教師として個人的に近づくことを含む「神権者を再び活潑にするプログラム」を運営する適切な方法を研究し提案をする。

(6)不活潑会員に対してとくべつな講習を行う計画をする。

(7)定期の学科課程を行うために教授上の補助となるものや種々の提案を出す。

(8)「標準の改宗者獲得計画」の中にあるレッスンを実さいに行って示す。

(9)不活潑会員（家族も含めて）と家庭集会を開く計画をして取りきめをする。

(10)毎年行う「非公開の訪問」をするための正しい手つずきを論ずる。

(11)定員会の会員とその家族が系図の探求を行い神殿の儀式を受ける準備をするよう奨励をする。

(12)宣教師を供給したり、貧しい宣教師たちを助けるために基金を獲得したりして、地方部宣教師計画および外国宣教師計画を力づける。

(13)出席簿のつけ方、議事録のつけ方、報告のつくり方などについて指示を与える。

(14)不活潑な会員の一人一人に、何か教会の任務を与える努力をして支部長会と協力をする。

(15)定員会の基金を集めたり正しく使ったりすることについて指示を与える。

(16)道徳を守ること、誠実であること、清い生

活をすること、什分の一を納めること、そのほか福音の標準をすべて守り行うことを教える。

(17)定員会およびグループに関するすべての事務を考える。

(18)前の指導者会で割り当てたり提案したりしたことが行われているかどうか一々当ってしらべる。

八、支部神権会。

支部長会は毎週一回支部神権会を開くはずであって、この会に出席する者はその支部に属するアロン神権者とメルケゼデク神権者の全部である。開会の行事が終ってから、メルケゼデク神権をもっている会員は、定期に行う定員会もしくはグループの集りを開く。アロン神権定員会の顧問をしている者はこの集りに出ないでアロン神権定員会もしくはグループの集りに出る。しかし毎月第三日曜にはアロン神権の集りに出ないでメルケゼデク神権定員会もしくはグループの集りに出る。

九、メルケゼデク神権定員会（もしくはグループの集会）。

メルケゼデク神権定員会の会員は、支部神権会の一部として毎週開かれる定員会に出席するはずである。定員会（もしくはグループ）の会員が一支部の区域内に住んでいる場合には、毎月第二日曜を定員会の「ビジネス」を処理するための日とする。この時定員会の会長会は、定員会の「ビジネス」をすべて規則に従って処理し、同時に提案された企画について定員会の承認を得ることができる。

定員会の会員が各支部にまたがって散在している場合には、毎月開く定員会の「ビジネス」の集りは、定期の神権会と同じ時刻になることを避けて日曜の午後もしくは平日の夜に開くがよい。またメルケゼデク神権委員会（もしくはユニット）が多くの支部にまたがっており会員同志の住所が遠くはなれていて、毎月定員会の「ビジネス」の集りを開けないときには、地方部大会に関連して三ケ月に一回開く神権会にこの「ビジネス」を処理することができる。

十、神権者のためのとくべつ講習会。

神権者（家族を含む）の中からとくべつのグループを選んで、時々とくべつの講習会を開くことができる。

(一)定員会の役員が指図をして、不活潑な定員会の会員（家族を含む）の家で、一家族もしくは数家族の家庭集会を開く。

(二)伝道部神権委員会、地方部長会もしくは伝道部長会は、必要と認めるとき新任の定員会々長夫妻たちをよんで講習を受けさせるのもよい。

十一、神権委員会の管理。

伝道部に属する神権者はすべて定員会もしくは「ユニット」に入らなくてはならない。

たとえば、全伝道部を通じて四十九人以上九十六人までの「長老」がいれば一つの「長老定員会」を組織することができる。もしも「長老」の数が四十九人に満たないときには「ユニット」を組織するはずである。この「ユニット」が成長して会員数が四十九人をこえるようになれば「定員会」にするべきである。一つの伝道部には一つの「ユニット」だけがあることを許される。

伝道部にある「長老定員会」は定員会の会長会が管理をする。「ユニット」を管理するのは「ユニットリーダー」である。もしも「ユニット」が大きくなれば二人の顧問と一人の書記をおくことができる。

「ユニット」は伝道部全体にわたる組織であるから、その事務と活動は主として郵便によって行われる。

「長老」の数がふえて定員会を分ける必要が生じたときには、人数に応じて新しい定員

会が組織されるが、四十九人以下では定員会を組織することはできない。

三十六人以下の「七十人」が一つの伝道部にいるときには、「長老」のときと同じように一人の「ユニットリーダー」と二人の顧問によって「ユニット」を組織することができる。三十六人以上の「七十人」が一つの伝道部にいるときには一つの定員会を組織することができる。

大祭司の場合はその数が少なくても定員会を組織することができる。

定員会もしくは「ユニット」を組織する場合は、いずれも大管長会の承認を受けなければならない。

十二、神権「グループ」。

支部の中にあっては、「長老」「七十人」「大祭司」はそれぞれ「グループ」を組織することができる。「グループ」が集まって「定員会」もしくは「ユニット」を形づくる。神権者の活動、事務等は「グループ」をもとにして行うよりはむしろ定員会をもとにして行うべきである。

定員会が広い地域にわたっているときには、それぞれの「グループ」に社交活動を行わせるか、一つの「グループ」に一つの定員会計画を実行するよう割り当てるのが適当であろう。

十三、定員会の会長会。

「長老定員会の会長」は伝道部長が地方部長会と相談して選び、定員会の会員の支持を得た後、伝道部長会により、もしくはその指図によってとくべつに任命される。

「大祭司定員会の会長」は伝道部長会がこれを選び大管長会の承認を受けた後、「十二使徒評議員会々員」もしくは「十二使徒評議員会補助」によってとくべつに任命される。

以上の「会長会の副会長」は会長がこれを選び、伝道部長の承認を受けた後、伝道部長によってとくべつに任命される。

「定員会の書記」は定員会の会長会がこれを選び、伝道部長会の承認を受けた後、伝道部長会によってとくべつに任命される。「グループの書記」は定員会の会長会がこれを任命する。

「七十人定員会の会長」は伝道部長会がこれを推薦し、「七十人最高評議員会」の承認を得た後、定員会の会員の支持を得、然る後「十二使徒評議員会々員」もしくは「十二使徒評議員会補助」もしくは「七十人最高評議員会々員」によってとくべつに任命される。

「七十人のユニット」の指導者は伝道部長会がこれを選び、「七十人最高評議員会」の承認を受けた後、「ユニット」の会員の支持を得、然る後伝道部長がとくべつに任命する。

十四、「定員会の会長会」の責任。

メルケゼデク神権定員会の会長会は、自己の管理する会員の霊の福祉についてはもちろん物質上の福祉についても責任をもつ。会長会は自己の管理する定員会の会員が「日の光栄の国の永遠の生命」を受けるように導くはずである。この方針に従って進むために、会長会は熱意を以て精力を尽し身を献げて働らく義務がある。またすべてにおいて教会のプログラムに従い、率先して誠命を守り、口で説き身で行って教え、あまり活潑でない会員と一しょに働らくときには上手に分別と知恵とを以て働らく義務がある。また伝道部長会と伝道部メルケゼデク神権委員会から伝えられる勧告と指示に従う義務がある。

「定員会の会長会」は定員会の活潑な指導的なかしらである。とりわけ会長会は、

(一)定員会のすべての事務と活動を監督し指図をする。

(二)すべての「定員会委員会」の働らきを定めて指図をする。

(599頁に続く)

質疑応答

解答者　ジョセフ・フィールディング・スミス長老

「エンドルの口寄せがサムエルを呼び起したのはどうしたことか」

質　問。

「サムエル記上の第二十八章にイスラエルの王サウルが、予言者サムエルの死んだ後、サムエルから忠告を受けることができるように「呼び起し」てもらうため、エンドルの「口寄せ」をさがしたという話がのっています。

「私がふしぎに思うのは、「口寄せ」にどうして神の予言者の霊を呼び戻す力があったかということです。私には悪魔にひじょうな力があることがよくわかっていますが、この話が示していると思えるように、悪魔にどうして神の予言者を「呼び起す」ような力があったのでしょうか。

「この問題を解決するために力を借して下さるならたいへんうれしいと思います」。

解　答。

この話には枝葉にわたっていくつかの事があって、普通の読者は必らずしも事実と合っていない推測を下している。まず第一に、サウル自身は「呼び起こされた」霊を実際に見なかった。サウルが「その人がサムエルであるのを知った」のは「口寄せの女」の言葉からそう思ったのであった。この「口寄せの女」はうたがいもなくサムエルのことをよく知っていたから、容易にサムエルの姿かたちについて言うことができたのである。その女が鋭い感覚でその場のようすとサウルが絶望の状態に在ったことを充分承知していたことはありそうなことである。しかし、あらわれた霊を見てその姿かたちのことを言ったのがその女自身であって、サウルでなかったことは誰が見ても事実である。

チャールス・W・ペンローズ長老は千八百九十八年にこの問題に

ついてすぐれた記事を書いておられる。それはこの出来事を適切に総括しているので、次にそれをもう一度かかげて読者のお目にかけるのが一番よいことである。

（註。この記事は千八百九十八年五月のインプルーヴメントエラ誌に掲載されたものである）

旧約聖書にはイスラエルの王サウルがエンドルの「口寄せ」をたずねて、死んだサムエルの霊に会う話があるが、このことについてはいろいろのちがった見解が行われている。一般の考えでは、サウル王のもとめに応じて「口寄せ」の女がサムエルの霊を「呼び起し」た、サウルはこの霊と話をして、来るべきペリシテ人との戦いに於て彼を待っている最後を知らされたということになっている。しかし、モーセの律法によって生きていることを許されず、また人が相談することを神が禁じたもう「口寄せ」の女が、神の予言者の霊を招いて呼び出す力をどうして持っていたかという疑問が起る。この疑問に対して、その女は実は「口寄せ」ではなくてかくれた真の「女予言者」であったという提案が出されているが、なぜ世間をはばかってかくれていなくてはならなかったかということについては明らかにされていない。これまで、この「女予言者説」はこの問題を完全に理解していると思っている人々が主張していると言われている。それはどうでもよいが、この出来事の歴史を注意深くしらべてみると、この問題について大きな誤解がこれまであったことがわかるにちがいない。まず聖書の記者が言っていることを読んでみよう。

「ペリシテ人が集ってきてシュネムに陣をとったので、サウルはイスラエルのすべての人を集めてギルボアに陣をとった。

「サウルはペリシテ人の軍勢を見て恐れ、その心はいたくおののいた。

「そこでサウルは主に伺いを立てたが、主は夢によってもウリムによっても予言者によっても彼に答えられなかった。

「サウルはしもべたちに言った『わたしのために口寄せの女を探し出しなさい。わたしは行ってその女に尋ねよう。』しもべたちは彼に言った『見よ、エンドルに一人の口寄せがいます。』

「サウルは姿を変えてほかの着物をまとい、ふたりの従者を伴って行き、夜の間にその女のところにきた。そしてサウルは言った。『わたしのために口寄せの術を行ってわたしがあなたに告げる人を呼び起して下さい』

「女は彼に言った『あなたはサウルがしたことをご存じですか。彼は口寄せや占い師をその国から断ちほろぼしました。どうしてあなたは、わたしの命にわなをかけてわたしを死なせようとするのですか』

「サウルは主をさして彼女に誓って言った『主は生きておられる。この事のためにあなたが罰を受けることはないでしょう』

「女は言った『あなたのためにだれを呼び起しましょうか。』サウルは言った『サムエルを呼び起して下さい』

「女はサムエルを見たとき大声で叫んだ。そしてその女はサウルに言った。『どうしてあなたはわたしを欺むかれたのですか。あなたはサウルです』。

「王は彼女に言った『おそれることはない。あなたには何が見えるのですか』。女はサウルに言った『神のようなかたが地からのぼられるのが見えます』

「サウルは彼女に言った。『その人はどんなようすをしています

か』彼女は言った『ひとりの老人がのぼってこられます。その人は上着をまとっておられます』。サウルはその人がサムエルであることを知り、地にひれ伏して拝した。

「サムエルはサウルに言った『なぜわたしを呼び起してわたしをわずらわすのか』。サウルは言った『わたしはひじょうになやんでいます。ペリシテ人がわたしにむかっていくさを起し、神はわたしを離れて予言者によっても夢によっても、もはやわたしに答えられないのです。それで、わたしのすべきことを知るために、あなたを呼びました。

「サムエルは言った。『主があなたをはなれてあなたの敵となられたのに、どうしてあなたはわたしに問うのですか。主はわたしによって語られた通りにあなたに行われた。主は王国をあなたの手からさきはなして、あなたの隣人であるダビデに与えられた。

「あなたは主の声に聞き従わず、主のはげしい怒りに従ってアマレク人をうち亡ぼさなかった故に、主はこの事を、この日、あなたに行われたのである。

「主はまたイスラエルをもあなたと共にペリシテ人の手にわたされるであろう。あすはあなたもあなたの子らもわたしと一しょになるであろう。また主はイスラエルの軍勢をもペリシテ人の手にわたされる』(サムエル記上二十八〇四—十九参照)。

この話を読んでみると、サウルのたずねた女というのは神の命によって禁ぜられた階級の女であったことが明らかである。彼らは口寄せの術を行っていたからであった。当時予言者たちも女予言者たちも、国外へ追放されずまたけいべつをされてもいなかった。

モーセの律法が施行されていたために人目を忍ばねばならなかったのは、モーセの律法によって罪ありとされた人々だけであった。イスラエルの王サウルは、神の導きを得るためにあらゆる合法的の手段方法をつくしたが、彼自身が主なる神から離れてしまっていたので、主なる神もまた彼から離れてしまっていた。サウルのたずねたことに対して天から何の答えもなかった。予言者たちによる主なる神のことばもなく、「ウリムとトミム」による天からの便りもなく、霊夢による顕示もなく、神の霊のささやきもなかった。サウルは絶望のあまり「反対の力」の方へ向いたのであった。彼はこのようにして罪を犯した。サウルは主なる神の律法を破ったことを自分でよく知っていた。彼がかって神に仕えていたときには「口寄せや占い師をその地から追放した」のであったが、ひとたび暗黒におち入るや、暗黒の道をもとめて自らの「悲惨な結末」を確実にしたのである。

聖書には「こうしてサウルは主にむかって犯した罪のために死んだ。すなわち彼は主のことばを守らず、また口寄せに問うことをして、主に問うことをしなかった」(歴代志上、十〇十三、十四参照)としてある。

このような術を禁ずる律法は、予言者モーセを通して与えられ、モーセの法典の一部となっていた。

「あなたがたは口寄せ、または占い師のもとにおもむいてはならない」(レビ記十九〇三十一参照)。

「あなたがたのうちに、自分のむすこ、娘を火に焼いてささげる者があってはならない。また占いをする者、卜者、易者、魔法師、呪文をとなえる者、口寄せ、かんなぎ、死人に問うことをする者があってはならない。主はすべてこれらの事をする者をにくまれるか

らである。そしてこれらの憎むべきことの故にあなたの神、主は彼らをあなたの前から追いはらわれるのである」（申命記十七〇十一―十二参照）。

そこで、エンドルの「口寄せ」は主なる神の女予言者ではなく妖術を使う女、すなわち死人と交通をする者もしくは交通ができる如く見せかける者であったが「親しい霊」の導きを受ける女であった。言葉をかえて言うとこの女は、自分はある予言者の霊の導きを受けているから、自分を通じて死者と通信ができると主張している近代の先生方と同じような一人の霊媒であった。

イスラエルの王サウルが降霊術の場に在ったとき、サウル自身はサムエルも何も見ずに、その霊媒もしくは「口寄せ」がサムエルを見たことは、注目すべき点である。この「口寄せ」の女は「ひとりの老人がのぼってこられます。その人は上着をまとっておられます」と言った。サムエルがこう言ったと、サウルに言ったのは「口寄せ」の女であった。そして、サウルはその「口寄せ」の女が自分に言ったことばによって「その人がサムエルであることを知った」のであった。そして次に行われたサムエルとサウルとの間の会話は、この女霊媒の指導によって行われたのである。すべて以上のことは、まったく予言者サムエルがいなくても起ったことであった。この女霊媒は、自分のもつ「親しい霊」の力によって、サウルに対してサムエルから発せられたと思われることばを告げることができたのである。これと同じように、近代の霊媒たちは、サウルの時のように夜間もしくはくらがりの中で術を行い、死んだ人々から通信があったかのように生きている人々にことばを告げるのである。

このような人々が、今でも昔でも、死んだ「神の予言者」もしくは「神の女予言者」の霊を呼び起すことができるとは、とうていまじめに信ぜられないことである。このような「神の予言者」たちの霊が、女魔法使いや、易者や、妖術使いの招きに応ずるはずがない。もしも「パラダイス」の中にいる霊であって、これらの怪しげな者たちの招きに応ずる霊があるなら、それらはまことにあわれむべき状態に在る霊である。これらの霊は安息を得ず、この世の生活のわずらいや労苦から離れることができずに、束縛の状態にあって、神を知らずその生活や目的が現世以外にない人々の意志やささやきに従うのである。

また「主の予言者」や「主の女予言者」が、予言者たちや聖徒たちの霊を意のままに呼び出したり戻したりして、現世のことについて話をさせるのは正しい教義に反している。こういうことは「真の予言者や女予言者」の任務ではない。このようなことが肉身をもっている人間の命令でできるということは、どの末日聖徒ももってはならない考えである。

主は仰せになった「人々があなたがたに向って『さえずるように、ささやくように語る巫子および魔術者に求めよ』という時、民は自分たちの神に求むべきではないか。生ける者のために死んだ者に求めるであろうか。ただ教えとあかしとを求めよ。まことに彼らはこの言葉によって語るが、そこには夜明けがない」（イザヤ書八〇十九―二十参照）。

サウルがエンドルの「口寄せ」のところへ行ったときに、主なる神は霊の状態でサムエルをサウルのところへつかわし、話を交じえて、今や来らんとしているサウルの「悲惨な結末」を告げさせたもうたのだ、という提案をする人々がある。しかし、この見方は聖書

の中でくわしく述べてある話と一致していない。もしも主なる神が、サウルに彼の「悲惨な結末」を知らせたいとお考えになったら、サウルが啓示を得るための正しい道をふんでおねがいしたときに答えをお与えになっていたはずである。サウルはあらゆる手だてをつくしたがついに神の答えが得られなかった。主なる神が、自分自らお定めになった手段と方法を無視して、予言者サムエルを禁止された方法によって呼び出し、話をおさせになるわけがない。主なる神が、こうした目的のために、神の律法が厳重に禁じている霊媒をお使いになるわけがないではないか。

「しかし待ちたまえ。その時に霊が言った予言はすっかり実現したではないか。イスラエルはペリシテ人の手にわたされ、サウルも三人の息子も鎧をもつ者も側近の者もみな殺されたではないか。それなら、あの予言は真の予言であった」と論ずるものがある。事実その通りであったとしても、筆者の立場は少しも弱くなっていない。もし魔法使い、妖術者、霊媒など、律法で禁ぜられていた者たちが、時として本当のことを予言しなかったなら（すなわちいつもその予言がはずれていたなら）、人々にこれらの者と相談してはならないという必要はなかったであろう。もしも悪魔がいつもうそばかり言っていたなら、悪魔はけっして人類をあざむくことができないであろう。（悪魔のことばの中に本当のことがまざっているから人はだまされるのだ）。悪の力はいくらかの光明を使わなければ優勢にはならない。見ただけでは正しいと思える間違いに、ちょっと真理をまぜておくということが、人間を堕落させるために悪魔の使う一つの手段である。それであるから、サウルがエンドルの「口寄せ」の女に会ったときの出来事には、この女が実は「神の女予言者」であったとか、サムエルが真実あらわれたとかいうことを合理的に教義の上から確立するものは一つもない。

死者の霊が、霊媒もしくは通常「霊界交信」に使われている方法で、生きている人間と意志を通ずるということはまだ完全に証明されていない。悪霊は、うたがいもなく「支配霊」として働らき、死者の霊を登場させたり、彼らと彼らの生きている友人だけが知っている事をあらわしたりして信じ易い人々をまよわせるが、このような暗黒の力に自分から支配される人々は、義しい人々の霊を出てこさせることも、生きている人々に秘密を話す心を起させることもできない。義しい人々の霊はこれらの者の力のおよばないところにあるから、霊媒たち自身がしばしば悪霊のえじきとなり「人をだますと共に自分もだまされている」のである。

「主は宣う。わが家は秩序の家にして乱れの家にあらず」。神がなにごとかを現わそうとなさるときは、いつも義しい道と義しい手段とにより、主の任命なさった人を通して行われる。もしも生きている人々が死んだ者から何ごとかを聞きたいならば、主なる神に求めるべきであって「天使らが足をふみ入れることをおそれる」ところへあえて飛びこむ人々に求めるべきではない。現界と死者の霊の住む世界とははっきりとわかれており、その二つの世界の間には神のみこころによって幕が下がっている。正常の状態では、生きている人々が、死んだ者たちに会って話をすることができないと同じように、霊界にいる人々が、正常の状態では、肉身をもっている人々と話をすることができないとわれわれが考えるのは当然である。

神の許しがあるときには、現界にいる人々と霊界にいる人々とが

（586頁に続く）

信仰講話

（これは千八百三十四年から仝三十五年の冬季間、オハイオ州カートランドで行われた「長老のクラス」で述べられた講話である）

第一講

一、信仰はキリスト教の第一原則であり、またあらゆる義の基であるから、イエス・キリストの教えを理解させるために計画された講義の最初に当然説かれるはずである。

二、信仰という問題を説くに当って、われわれは次の順序を守って行こう。

三、第一―信仰の本質（信仰とは何であるか）

四、第二―信仰の目的

五、第三―信仰から生ずるいろいろの効果

六、以上の順序に従って、まず始めに信仰とは何であるかを説こう。

七、ヘブル書第十一章一節には、信仰という言葉を定義して次のように言ってある。

八、「それ信仰は望むところを確信し、見ぬものをまこととするなり」と。

九、この聖句からわれわれは、信仰とは人がまだ見ていない物の存在を確認し、またあらゆる英知ある者の行動の原則を確認することであることを知る。

十、もしも人が自分自身のことを十分に考えて、自分の心の働らきを深く反省して見るならば、自分によるあらゆる行動を起す原因となっているものは信仰であり、しかも信仰だけがその原因であることを容易に知るであろう。

十一、このクラスの諸君が、各自の記憶の始めから今までに至る生涯の歴史を反省して、自分がどのような原理にうながされて行動したか、または各自の正当な職業および仕事をするに当って何が自分に力と活動とを与えたかを自問するならば、何と答えるであろうか。

それらの原動力となったものは、まだ見ていないものを実際にあるとする確認ではなかっただろうか。それは自分が得ようとするための行動と努力をうながした、まだ見ていないものの存在を信ずることの結果として抱いた希望ではなかったか。

君たちがあらゆる知識と知恵と英知とを求めているのは信仰をもっているからではないか。もしもこれらのものを得るという信仰がなかったなら、君たちはこれらのものを得るために努力をするであろうか。

収獲があると信じなかったなら、どうして君たちは種まきをす

るであろうか。もらえると信じなかったなら、どうしてねがい求めるであろうか。見出すという信仰なしに、どうして探し求めるであろうか。また開けてもらえるという信仰なしには、どうして戸を叩くであろうか。

ひとことで言うと、もしも前以て信じていなかったら、人は肉体的にも精神的にも何一つしていなかったであろう。君たちの行うあらゆる努力は信仰があるからこそではないか。信仰のためでなくて得たものが何かあるかとたずねたい。君たちの食物、衣服、住居などはことごとく信仰のために得たのではないか。

これらのものが一つでも信仰なくして得られたかどうか深く反省していただきたい。

次に君たちの心をよく反省して自分自身の行動をうながした原因が信仰であることを知っていただきたい。もしその原因が君たちの中にあるなら、それはほかのすべての人々、すなわち知能のあるすべての人々の中にもあるはずである。

十二、次に、信仰は物質に関するすべての行動をうながす原因であると共に、また精神界に於いてもそうである。「救い主」が「信じてバプテスマを受くる者は救わるべし」（マコ伝十六〇十六）と仰せになったことばは真実である。

十三、人は信仰によってあらゆる物質的のめぐみを受けると同様にまた信仰によってあらゆる霊のめぐみも受けるのである。信仰は行動の原理であるだけでなく、また天上地上を問わずあらゆる「英知ある者」の力の原理でもある。

ヘブル書の第十一章三節には次のように誌してある。

十四、「信仰によりて、われらは、もろもろの世界の神の言にて造られ、見るもののあらわるる物より成らざるを悟る」（欽定訳聖書「英文」ヘブル書十六〇三参照）。

十五、この聖句からわれわれは「もろもろの世界が造られた」力、すなわち神の内に存在していた力の原理が信仰であることを知る。またあらゆる創造物が現に存在するのは神の内に存在しているこの力の原理のためであることを知る。従って、天上、地上、地下を問わずあらゆる物は神の内にあった信仰のために今存在しているのである。

十六、もしも信仰の原理（力の原理）がなかったなら、もろもろの世界は造られなかったであろうし、人類もまた塵から造られなかったであろう。信仰は、これによってエホバが働らきたもう原理であり、これによってエホバは此世のものも永遠なるものもすべてを支配管理したもうているのである。この原理、もしくは（性能）を神からとり去ったなら神の存在はなくなるであろう。

十七、もしも神が信仰によってもろもろの世界を造りたもうたなら神がそのもろもろの世界を支配したもうのは信仰であり、また信仰が力の原理であることの解らない者はないはずである。もしも信仰が力の原理であるなら、神にあってはもちろん人間にあってもそうでなくてはならない。

これは聖典の筆者がことごとく証しをしていることであって、これまで人々に教えようと努めている教訓でもある。

十八、イエスの弟子たちが悪鬼を追出すことのできなかった理由を説明して、「救い主」は「汝ら信仰うすき故なり。まことに汝らに告ぐ、もしからし種一粒ほどの信仰あらば、この山に『ここよりかしこに移れ』というとも移らん。かくて汝ら能わぬことなか

るべし」（マタイ伝十七〇十九―二十参照）と仰せになった。

十九、モロナイはその父のしるした記録を抄録編集していたとき、力の原理としての信仰を次のよう説いた。すなわち牢屋の壁が裂けて地に倒れたのはアルマとアミュレクの信仰による。またレーマン人が聖霊と火のバプテスマを受けてその心を変えたのはニーファイとリーハイの信仰による。またジェレドの兄弟が主の御名によってゼーリン山に移れと言ったとき、ゼーリン山が移ったのはジェドレの兄弟の信仰による、と。

二十、このほかにまた、ヘブル書第十一章三十二、三十三、三十四、三十五節にはギデオン、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエル、そのほかの予言者たちが信仰によって「国々を従え、義を行い、約束のものを得、獅子の口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱きよりして強くせられ、戦争に勇ましくなり、異国人の軍勢を退ぞかせ、女は死にたる者の復活を得」たことなどが誌してある。

二十二、ヨシュアがイスラエルの目の前で「日よギベオンの上にとどまれ月よアヤロンの谷にやすらえ」と言ったとき、その通りになった（ヨシュア記十〇十二参照）。

二十二、ここに於いてわれわれは、聖典の筆者たちがみなすべて以上のことが信仰によって行われたと言っていることを知る。もろもろの世界が造られたのは信仰による。神が言を出したもうたから混乱はしずまり、神の内にあった信仰のためにもろもろの世界が整った。人間でもこれと同じであって、人が神の御名によって信仰の言を出せば、太陽は留まり、月は命に従い、山は移り、牢屋は倒れ、獅子の口はふさがり、人の心のうらみは消え、火は勢いを失い、軍勢の力はなくなり、剣のおそれは失せ、死は征服された。これはすべて彼の内にある信仰のために事実となって現われたのである。

二十三、もしも人々に信仰がなかったら、太陽に月に山に牢屋に人間の心に火に軍勢に剣にまたは死に向って言を出したかも知れぬが何の効もなかったにちがいない。

二十四、そこで信仰は、あらゆるものを支配する力であり主権であり権能である。主のみこころにかなうとき信仰によってあらゆるものが存在し、信仰によってあらゆるものが変り、もしくは変らずにつずく。信仰がなければ何の力もない。何の力もなければ、何の創造も何の存在もないであろう。

（591頁から続く）

㈢定員会の会員の物質上の必要を含むすべての定員会計画に関する働らきを統制する。

㈣すべての「グループリーダー」の働らきを定め、勧告を行い、指図をする。

㈤各「グループ」の中で適切なまた正統的なクラスの教授が行われるように確かめる。

㈥定員会の会員が福音の儀式を執り行うことのできるように教える、はずである。

（以上メルケゼデク神権定員会について「メルケゼデク神権の手引き（伝道部用）」より）。

或る聖研より

（聖書研究会）

台風の雲が忙しくゆきかう八月の日曜日に記者はこの聖書研究会に出席して、三十人あまりの兄弟姉妹の討論をメモしながら、この記事が皆さんの同じ集まりの参考になることを願っていました。

この支部の聖研は神権者の中に活動委員会というグループがおかれてその一つの活動として開かれている由、部屋にはいると正面の黒板に今日のテーマであるらしいルカ伝十四章の内容が箇条書きにしてありました。

一、安息日の問題。
一、上座につくな。
一、晩餐のなかみ。
一、神のみを求めよ。
一、準備を周到にせよ。

司会　この聖研は白馬山荘に合宿した時にいたしました。始めにこの章を一度読んで頂きますから聞いて下さい、そして上の問題を論求し、考えていることもどんどん出して下さい。それでは祈りによって始めましょう。

×　×　×　×

司会　私たちは日曜日にはいつも仕事をしないでいますが、イエスが安息日に病人を癒されたことについてこれはどうでしょうか。

A　安息日は人間のためにあるものであって安息日のために人間があるというものではないと考えると人を癒すというわざは構わないではないでしょうか……。

B　イエスは安息日でよくいじめられているけれど、この時代のイエスは他所の本でみるとまだ神の子であるという事をはっきり世に示されていない時代なのではないだろうかと書いてあったが、もしそうならその立場を通すために正当化しようとしたのではないかな……。

司会　はい、貴方はどうお考えでしょうか？

C　昔アメリカで日曜日には仕事をしてはいけないという法律を出したことがあったんですが、仕事をしてはいけないといった議員が日曜日にペンキ塗りをしていたのを巡りにみつかって牢屋へぶち込まれちまったという話もあったんです。電気だとか消防だとか、日曜日に火事を出したら丸焼けになってしまえというのでなく、警察もそうです、警察がなければ秩序が保てません、従って社会生活にして良い事はしなければいけないと思います。

A　いったい当時のユダヤでも安息日を、そんなに守っていられたんだろうか？

D　それは律法だったから…。

E　今の状態を考えてみると当時と大分環境が違っているんではないかな？

F　当時は農業が中心で都市の社会も大分違っていたんでしょうね。

司会　電車の車掌さんや運転手さんは日曜日を安息日として守ってないでしょう、それに乗って教会に集うという事に抵抗を感じませんか。

G　感じますね。

司会　以前都電の車掌さんの会員が『日曜日にはそれこそ何ケ年に一度しか教会に行けません』といったら『仕事を替えなさい』と宣教師から言われた、という事をいってましたが、皆さんがそのような事になったらどう思いますか？

H　自分がその境遇だったら、今の仕事だったらやはり仕事をしますね。

I　皆が皆わがままいえませんからね。

J　しかしその様な時に教会が特に安息日を強調するならやはり困ってしまいますね。

B　丁度パリサイ人が黙ってしまったように黙ってしまうしかないですね。

F　やはり当時の社会の背景で云ったんで現在は考えが違うのではないですか……。

C　しかし、誠命なのだからやはり守る事は必要ですね、他に誠命が沢山あるから、それを全部守って、その上に安息日を守る様に努力する、そこに向上があるんじゃないかと思いますね。

宣教師　教会の説教でジョセフ・フィールディング・スミス長老の話で、彼は金曜、土曜に日曜の準備をすべて済ましてそして何もしない様にしていると言っています。やはり出来るだけ守る様に用意をする事は必要です。

（編集子註。現在の社会組織では交通通信医療機関などの従業員、炭坑工場その他の施設の保安要員が安息日にも働らくことはやむを得ないと考えられています。しかし転職を希望する人には神権定員会が強力な援助を行うはずです。定員会が充分強力になれば問題はあるていど解決がみられます）

司会　次の問題は何を意味しているんだろうか。

J　これはパリサイ人の席にいった時の話だから彼等を間接に非難しているのではないかな、しかし根本は心の問題ですね。

K　人間の高慢さを改めているのではないだろうか……。

司会　謙遜とか、へりくだる心とかいうことはいったいどんな状態だと思いますか？

L　自分の本当の姿をみつめて、才能以上に見ないこと、これは自分の自慢を抑えることではないでしょうか……。

D　この例え話をみると、何か始めは卑下していて後でほめられようというは功利的で不純みたいに思えるけどね……。

司会　しかしここでは彼を高くするのは神様なのだから問題ないんじゃないかな。この次の12節以後は一体なにが書いてあるのかな？……。

B　あの黒板はぼくが書いたのですけど、何が中心なのか分らないで……。

M　ここに書いてあることは人は利己的であってはいけないということでしょう、お礼を期待しないで天に宝をつむと書いてありますね。

N　しかし本当に心から兄弟や友人や隣の人を招くことは悪いこととは思えませんけど？

O　それはそうですね、ここではそういうことをいっているんじゃないかな。

司会　結局パーティーや親睦会を開いたりするということは神様の前に必要なことではないからそれより施こしをするということが大切であるという教えにはなりませんか

？

P　それではかえす事の出来ない人に施こしをしなさいというのはどういうことですか。

Q　ここでは、この場に招いた人たちがイエスに対して報いを要求していることをいさめたのではないですか？

司会　しかし、やはり明らかにここでは天に宝をつむように教えていますね。

D　当時のパリサイ人たちがこういう盲目の人や貧しい人に施こすという事はまずないといってもいいでしょうから、その人たちをいさめている事にもなりますね。

（編集子註。七節から十一節までは「己れを卑うせよ」という教えであり、十二節から十四節までは「此世の酬いを期待しない善行が神に喜ばれる。返礼のできない弱者を助けよ」という教えであると解されます）

司会　次の所は難かしいですけど、このストーリーは分りますね。いったいこの主人は誰をたとえているのでしょうか？

R　やはり前から続いて、招いた人と考えられますね。

S　他の例え話の時には主人は神様である事が多いんだから神様と考えたらどうかな。

司会　そうするとこの招かれた客が断わったという事はどう考えたらいいでしょうか。

C　これは伝道するということがいかに難かしいかということを言っているんだと思いますが、我々にもやはりそういう経験がありますからね。

司会　いったい二十三節の〝無理やり引っぱって〟きてもという事はどういう意味かな？

S　僕の考えとしてですけど貧しいものとか盲目の人というのは義や真理を求めている人、すなわち飢えかわいている人と考えたらどうでしょうか？招かれた会員になった人でも義や真理を求めるものでなければ何となく立去ってしまうという事を表わしていないかな、それにしても無理やりにというのは分らないけどね。

R　無理やりにとしか読めないけど何か意味がありそうだね。やはり分らない。

（編集子註。このたとえ話の一つの解釈を参考のために申します。「招いておいた人」とはモーセの律法を与えられたユダヤ人、「貧乏人、不具者、盲人など」はみつぎとり、遊女など当時「罪人」と考えられていた人々、「道やかきねのあたり」にいる人々は「異邦人」、「むりやりに」とは辞退ができないほどにしてとの意味、力を用いてとの意ではない。神は不幸難難を与えてさえ人を招きたもうことがある。モーセの律法を与えられたユダヤ人は福音を受け入れず、異邦人が招かれて福音のめぐみにあずかることが言ってあると解されます）

D　この文章の構成から前の方の続いているみたいに思えるけれど……。

S　15節の『おほよそ神の国にて食事をするものは幸福なり』といったのは茶化していったんだろうか、それとも真面目に云ったものかどっちだろうな。

T　ここの或る人というのは a certain man と書いてあるから文法で習った所によるとも誰だか分っている『或る人』という意味だからやはり神様を表わしていると思いますけど。

R　或る人という所がですか。

T　ええ some と a certain の違いを高校で教えられた所によるともう名前が分っているが或る人と云ったんではないかと思います。

（編集子註。「ある人」とは最後に「わた

しの晩餐」と言ってたね明しがしてある通り「キリスト」御自身を指しています）

司会　或る人は神様で分りますけど招かれた人と貧しい人たちは何を意味するか分り難いですね、先に進むと分るかも知れませんから進んでみましょう、次は27節までですね、ストーリーは何ですか、ある『富める人』のたとえ話を思い出して下さいませんか。ストーリーを云ってもらえますか。

B　当時イエスには沢山の弟子になりたいという人がついて来たんでしょう、その人たちにイエスは普通の決意だけでは本当の弟子になれないと云った、己が十字架というのは、これ僕の意思だから止めます、ストーリーはこれだけ……。

司会　己が十字架って何でしょうか。

B　それは、アッ　すみません、僕話していいですか。

司会　どうぞ。

B　それはやはり死を覚悟でキリストに続くという意味にならないかな。

宣教師　十字架はキリストの印ですから彼についての証詞を常にするという意味でしょう。

S　イエス・キリストが我々の罪をせおって下さった事、それはイエスの果された神の御計画の一部の務めであったわけですから我々が果すべき神の計画の責任ではないでしょうか？

V　それもはいるけどやはり家庭の事を顧みないでその責任を果すという意味が強いですね。

（編集子註。「己が十字架を負う」ということの意味については「聖徒の道」一九六二年五月号三〇六―三一一頁、扶助協会レッスン「神学」の項を参照して下さい）

R　しかし、現在の世界に生きて家庭をすてるという事は果して出来るでしょうか。

K　家庭をすてて自分が救われるという考えは利己的だと思いますわ。

T　クリスチャンは自分の救いを考えるから利己的な本質をもっているのではないかな

C　しかしこの場合、『憎む』という表現としているけれどこれは神を愛するという事を考えて比較の問題で表現しているのではないかな。

宣教師　やはり愛する事は愛するのですけど神様を愛する方が大きいです。

S　やはり利己的は利己的にはなるけれど結果的にそれは利己的でないという事だろうな。

B　イエスのこの教えは非常に強い命令としてキリストの理想を慕って来る人に向って釘をさしたのであって後の塩の問題に続いて行くと思いますね。

司会　意見が分れた様なので先に進みましょう、分るかも知れませんから。

Y　この辺に云っている事は中ぶらりんにならないという事が主ですね。

E　自分の財産をすて切ると云う事がこの準備の中心ではないかな。

F　財産をすてると云う事ではないだろ。これはルカ伝十六章の問題に続くね。

宣教師　全ての財産をすてるという事は違うと思います、例えば副管長のモイル長老はアメリカの中でもお金持のうちの一人ですでもお金の事、神様の事と考えるといつも神様の事を考えます。

B　お金は不正の富というのはお金の使い方なんです。このお金、エート銀貨だ、これこのお金は不浄の富なんですけどお金の使い方によって神様の役に立つわけです。

教会はお金がずい分ありますけど神に代って使っている以上それは富の追求ではな

（603頁に続く）

支部だより

福岡支部

七月、八月にバプテスマを受けられた方々。
（七月）井上綾子、品川洋一
（八月）宮原あけみ、高木よしあき
有園ひろこ、くまのせつこ
あしがたけを、吉葉けいぞう
神権昇進
（教師）西田隆一
（執事）竹内宏美、重岡利夫、野間隆一
坂井和治、佐伯
宣教師の転出転入
（転出）サドラ長老、群馬支部へ
ライマナ長老、金沢支部へ
（転入）トーマス長老、東京北支部より
原口長老、金沢支部より

◎八月四日はMIA福岡支部大会が生の松原の浜辺でキャンプを行う事になり、この日はMIA地方部リーダーの田口兄弟、田口姉妹をむかえて力強いリードのもとに求道者、会員、宣教師と共になごやかに開かれた。姉妹たちが用意してくれた色とりどりのオニギリはきれいにモロブタに並べられ、ハッピスタイルの長老たちの手によって無事にキャンプ地まで運ばれて来ました。若人の胃袋は絶えず食物を欲求し、たくさんあったオニギリもいつしかそれぞれの胃袋へと姿を消してゆきました。でも皆んな元気いっぱい働いて、よく遊び、よい結果を得る事が出来て本当によかったと思います。また五日の日曜日は日曜学校福岡支部大会がテーマ（自由意志）について行われ名古屋支部より柳田姉妹、また日曜学校地方部リーダーの古芝兄弟をむかえていろいろ有意義な話しを聞く事が出来ました八月二十五日、二十六日は広島、柳井、福岡支部の三支部が集まり福岡にて西中央地方部夏期大会が開かれた。MIAは生の松原のキャンプ、日曜学校は天神ビル十一階で行われました。（この大会については、他の欄に記載されるので省く）

今、福岡支部は小さな支部ですが、土台がしっかりしていれば決してくずれる事がないという事をおぼえて、私たちは力を合わせ、手をつないで、しっかりした土台を組み支部を日一日と大きく育てていかなければいけないと思います。

西宮支部

宣教師転任
ステレオ長老　↓　東京西支部
アイダホ州　↓　ジョージ・ケント塩沢長老
パルマ長老　↓　仙台支部
阿部野支部　↓　パルマ長老
補助組織変更
子供日曜学校責任者　北川兼子姉妹
聖徒の道販売係　安久津兄弟
ダンス指導者　片山京子姉妹
八月八日「ピクニック」
この日は珍らしく子供日曜学校では楽しいピクニックに行きました。箕面は自然の景色に囲まれてきっと子供たちは満足の気持を家庭にもち帰った事と思います。その責任者は次の様に記事を取って下さっています。
私たちは八月八日箕面の方へ子供たち20名

と沼野、田辺、坪内、西川兄弟、大内、久保後藤、北川姉妹と28名は夏休みを利用して大変な暑さの日中でしたけれども揃って行きました。流れる滝を眺め、小川に足をぬらして子供たちは楽しそうでした。放し飼いのさる等、愛敬をふりまわしておりました。四時、無事に帰る事が出来たのと、兄弟姉妹の援助と神様の大いなる助けに守られ、また楽しい一日を過ごす事が出来ました事を心から感謝致します。

仁川に教会堂ができた頃は、二、三人の子供たちの集会でしたが、北川姉妹の責任の後には20名以上の子供たちが出席してすくすくと成長しています事を、私たちは心より感謝しております。

八月八日「若人の集い」

午後より十八才以下の若い人たちの集いが行われました。内容は歌やゲーム、タレントの発表等々、若い人たちの最も健全であり、神聖である場所に共に集って語り合ったり明るい交際をする事等大いに奨励するべきですまたこの会を通して団体生活の必要とする教訓の数々を個々学び得られた事は、私たち年上の皆様からみても悦ばしい事ですし、またそう望む事です。西宮支部には若い会員がぐんぐんふえてきています。これからもそうした人たちの活躍が期待されます。

八月三日、四日

この二日は生瀬の川岸で楽しいキャンプを催しました。詳細は別欄に載ると思いますが、歓迎委員の不自由ながらも懸命だった計画に心より感謝しています。

岡町支部

岡町支部年中行事の一つとなっている貸切バスによる海水浴場行きを七月二十八日(土)に行う予定でしたが台風7号のため、延期し三十一日(火)に行いました。岡町駅前を八時半に出発し、住吉公園で少し休み、十一時に二色ケ浜に到着しました。昼食後砂浜で西瓜割競技が始まり、男子、女子、子供の三組に分れて目かくしをされ、長い竹の棒をふりかざして妙技、珍技をふるい、秋元彬江姉妹が平素訓練?された腕にものを云わせ、只一人美事に真二つに割って女子組の勝でゲームを終りました。宮教師はサインを頼まれ、一躍スター気取りでサインし、人気が良いので気を良くしていた所を海に投げ込まれ、ついでに騎馬戦をはじめ、会員たちと大さわぎをしました。四時に海に別れをつげ、行きの元気はどこへやらスヤスヤと眠りながらおとなしく六時に無事に岡町に帰りました。参加者六十名、持参のアイスクリームの売れゆきもよく十分楽んだ上に支部予算の為の収益も上り一石二鳥の喜びでした。

八月五日(日)夜MIA主催のファイヤー

サイドが開かれ、牧瀬兄弟司会で「モルモン家庭の母として」上ノ山恵美子姉妹、秋元冨佐姉妹の話に引続き「父の立場から」渡辺驪兄弟、阪本弘兄弟の話がありました。次に家族の中自分だけが会員である立場から浅沼兄弟、国島姉妹の話がありました。その後で座談会の様に質問や話合をして時間が足りないのが残念でしたが、大変有意義な時間を過ごし家族中がモルモンである事、ことに一家の柱である主人がモルモンである家庭が如何に幸福な恵まれたものであるかを一層強く感じこれから結婚する人はこの様な家庭をつくらなければならない事を痛感しました。

八月十二日（日）午後四時半教会を出発して、箕面の山でファイヤーサイドを開きました。いつもバプテスマをする所よりずっと山道を登り少し広くなった芝生のキャンプ場で、牧瀬兄弟の司会で上ノ山恵美子姉妹の新婚時代の話、田渕兄弟のヴァイオリン独奏、阪本支部長の話、秋元彬江、紘江姉妹の二重唱、それに京都と東京に転任されるキャンベル、ギル両長老の送別を兼ねていたので、二人の美しい二重唱と話などを聞きながら、ファイヤーサイドの名の通り、燃える火を囲んで、四十五名位の出席者は、美しい自然に囲まれ美しい星をあおぎながらすっかりロマンティックな気持になり、何を考えていますかとの司会者の質問にも答える人はいませんでした。

◎八月十八日午後六時半から日曜学校主催の食べよう会「夏の夕べに」（ガーデンパーティー）が開かれました。〝この日のデイトは教会で〟というPRがきいてか出席者はいくつかのカップルを含む七十二名。日曜学校の役員がさんざん頭をしぼって考えたお献立は玉子とおねぎののった冷しそうめん、トンカツ、トマト、キュウリ、キャベツのせん切等お野菜、ジュースそれにデザートはアイスクリーム、ブッフェスタイルで食べ放題という豪華版。あちこちにちょうちんが飾られたお庭で蚊取り線香のにおいをかぎながら食べる味は格別でした。食後はホールでダンスをする者、お庭で話す者、あきずに食べる者とそれぞれ夏の夕べのひとときを充分に楽しんでいるようでした。本当に素晴しい会で、中本会長を始め役員達は皆大奮闘した疲れもどこへやら、晴ればれした表情でお台所いっぱいの洗い物、お庭やホールの後片付けにとりかかりました。

◎八月三十日、今年度最後のMIA特別プログラム〝約束しましょう〟。今年度MIAの反省とこれからのMIAのあり方等坂本泰造前会長、講崎幸子現会長の話の後、牧瀬十二郎会長から耳の痛むような質問が五問。

一、毎週努力してMIAに出席しているか。
二、MIAが本当に意義ある会と思うか。
三、必ず遅れないで出席しているか。
四、一週間のスケジュールの中にMIAを入れているか。
五、テキストを持っているか。

第三問で手を上げる人の少なかったのは残念です。

その後、新しい人も旧い人も一緒になって時間のたつのも忘れて大汗をかきながらフォークダンス、社交ダンスを楽しみました。

◎バプテスマ

細川晴世、家倉和美（八月十八日）
西　英明（八月十九日）
野坂佳子、野坂知子（九月一日）

◎神権昇進

執事　末吉寛次
教師　吉田次郎、水江三男

◎宣教師移動

転入　トロフ長老（東京西から）田野長老（仙台から）

転出　ギル長老（東京東へ）キャンベル長老（京都へ）トロフ長老（金沢へ）

名古屋支部

○八月二十六日、西中央地方部関西地区大会において、今まで一年半の間支部の為に献身的に働いて下さった支部長、柳田藤吉兄弟が解任されました。そしてここに新しく、現在まで第一副支部長として支部のために力を尽して下さった山田勝康兄弟を、支部長として迎えることになりました。

現在、解任された柳田兄弟は西中央地方部第一副地方部長に召され、すでに鈴木地方部長と共に活発にその活動を始めていらっしゃいますし、山田兄弟は若いながらもよく後を継いで現在その素晴しい活動ぶりを発揮しておられます。

また同大会において、長年の間名古屋支部扶助協会の会長を勤めてこられた八木沼節子姉妹が地方部扶助協会の第一副会長に召されました。これからは、同じ名古屋支部出身の会長柳田姉妹を助けて、地方部の扶助協会の上に大きな役割を果して下さることでしょう

○去る八月十一日、名古屋支部ではＭＩＡの計画により、例年の通り夏期特別レクリエーションを行いました。今年は五十人近くもの兄弟姉妹が参加して、バスで約二時間で行かれる内海という海水浴場へ行きました。皆、日に焼けながら、泳いだりスイカ割りをしたり、宣教師も交えてバレーボールをしたりして楽しい夏の一日を過しました。でも宣教師は泳げないので、仕方なく海を眺めたりせめてもの慰めに素足になって砂の上で遊んだりしていましたが、ハワイの長老が多いだけに一層残念そうでした。

○今月はバプテスマのプールが完成したというのに一人も受けた人がいませんでした。来月は何人か誕生されるようですが。

東京南支部

扶助協会の夏休みを顧みて

愛する口の悪い兄弟たちへ

皆さんは私たちの素晴しい集いであるこの扶助協会を井戸端会議と同類のもの、つまり口の運動をする会だと思っていらっしゃる様ですが、今度の事で少なからずビックリなさったのではないかしら？　井戸端議員によくまーあれだけ出来たものだと……

この事、すなわちアンドラス前伝道部長御夫妻の歓送会はこの夏の思い出として印象に残る出来事でした。南支部の扶助協会の夏休みといえば九月に催されるバザーの為に作品の製作に始まりバザーで終るのが常でしたが今年はこれと異り、この歓送会の為、仕事会を返上し、内山姉妹の手ずるで踊の先生に火曜金曜と来て頂き〝花笠音頭〟〝ソーラン節〟の練習に過しました。その努力の甲斐あり、送別会の当日粋なハッピを着た兄弟たちのハワイアンバンドの素晴しい演奏に合せて八人の扶助協会の姉妹とグリフィス長老、日本舞踊に興味を持っていらっしゃるウィルキンセン長老、それに田畑兄弟が加わり、日消ホールの舞台狭しとばかり伝道部長御夫妻に御披露致しました。

もちろんこんな素晴しいプログラムが出来たのも貴方々兄弟たちの力がありましたことは充分承知しているところです。しかし御家庭の主婦であられる長谷川、飯泉、内山姉妹が忙しい家事の時間をさいて私たちを練習に導き、私たち若い者も顔負する様な元気さで踊って下さったことは、いよいよ南支部の扶助協会も本当の扶助協会に近づいたのではないかと感ぜずにいられませんでした。

仕事会に踊りのレッスンなんかして口の悪い兄弟はオシャベリでは飽き足らずダンスま

でやり出しMIAをノシてしまうのではないかと余計な心配をなさった方もいらっしゃるでしょうネ。けれど決してMIAをノシたりする様なことはありませんから御安心の程を愛する姉妹たちへ

伝道部長御夫妻の歓送会の外にもう一つ楽しい思い出がありました。夏休み中毎月一回の予定で行うつもりでしたが、踊りの練習の為そうは行きませんでしたが、お料理の時間を持つ機会があったことです。最初は宣教師の姉妹たちに、次は山本姉妹にそれぞれアメリカの家庭で作られるお菓子の作り方を実習方々御説明頂き、季節柄、山本姉妹からはトマトの色々な料理方法を教わり皆さん各御家庭で腕を振われた様ですが、ここでグリード姉妹、フェイザー姉妹より教わりました〝ファジ〟(Fudge) の作り方を皆様に御説明致します。(地方の方々でもこれなら材料を簡単に得られると思いましたので)

材料

チョコレート　三枚(五〇円のもの)ミルクの入らないもの
マシュマロ　一〇コ
ピーナツ　二五円分位い(好みにより適当に)
バター　½ポンド
サトウ　二カップ
エバミルク　小一カン

調理方法

①チョコレート三枚とピーナツを細かくくだいてナベAに入れておく。
②マシュマロ、サトウ、エバミルクをナベBに入れマシュマロがとけるまで煮る。(約六分間位)
③大きな皿にバターを塗る。
④Bのナベが煮つまったらナベAに入れチョコレートが良く溶けるまで煮つめ、バターを塗った皿に移し、冷蔵庫に入れかためる

MIAリーダー

★おわび★

MIAカレンダーが印刷の都合でおくれましたことを、お詫び致します。すでに支部に発送ずみですから、お手もとにとどいた事と思います。なお、カレンダーは無料です。

○エンサイン・ローレルのテキストが出来上っておりますから、註文書に書き込んで支部長を通して申し込んで下さい。尚注文時は**必らず**お金を添えて下さい。

○聖徒の道にはMIAの指導者の為の手引が載っておりますから、役員教師はもちろん、会員の方も必らずお買い求め下さい。

(604頁より続く)

いから神の追求として代って来るわけですそれがすてる意味ではないかな?

宣教師　そのお金、早くすてなさい(笑い乍ら)ひろいます。

B　エェッ(みんな笑い出す。)

T　この十四章は一本として筋が通っていますか。

司会　そうですねこの章は一本の内容として筋が通ってますでしょうか?

M　この区分けが出来たのはずっと後の事だから問題ないんじゃないですか。

T　でも二十四節からは場面が変っていますから区切れるわけでしょう。

司会　大体三十分位超過しましたけどこの辺でおわりましょう。

「理想の家族生活を保持せよ」

主なる神が結婚の制度をお定めになったとき、主なる神は家庭を聖別してこれを神聖な所になさいました。大昔から、国民の道徳力はその家庭の安定度によってはかられています。現在、悪の力はいままでにないくらい家庭に挑戦をしています。もしも私たちの家庭がいつまでもつずくはずであるなら、両親と子供たちは善良な家庭がいつまでもつずくことを保証する理想にすべてをささげなくてはなりません。両親が示す疑いのない忠誠とたがいの尊敬とは、しっかりした家庭の土台であります。これによって疑惑と不信用とはなくなります。これによって子供たちに理想的な環境が生じます。忠誠のふんい気につつまれてそだつ子供たちはその父母をうやまうようになります。この反対に、仲たがいのしるしがあると、それは弱さのあらわれです。おたがいの愛は、忍耐と親切と考え深い思いやりと忠実と柔和と温かさと愛情とによって得られるものです。両親はもちろん子供たちもこのような美しい徳を修養する義務を負っています。

どの家庭にものこらず正義公正の感覚がみなぎっていなくてはなりません。この精神によって、両親も子供たちもおなじ道徳の標準を守るのであります。彼らは本能的に正しい選択と決定とをいたします。両親にも子供たちにも行為の標準がおなじであるとき、家庭に問題の起ることは比較的まれであります。両親の期待することを子供たちが知っているならば、子供たちはその期待にそってこたえることができます。善い態度ふるまいは教養と洗錬のある証拠であります。

これと密接な関係のあるのは、ほかの人々に対する思いやりであります。この思いやりの中に、両親の愛と子としての従順が本当にあらわれるのです。思いやりがあれば、けんか口論はありません。子供のしつけも愛の精神につつまれて立派に行われます。家庭の中に愛の精神がないなら、世界の平和があるはずがありません。思いやりがあるということは、家庭の中の仕事と責任とをわけ合うということを含んでいます。娘たちは家政の助けをしなくてはなりません。男の子たちは父母の手助けをするべきであります。娘たちは、見ぐるしくないように家を整えることに喜びを見出すべきであります。また男の子たちは庭や畑を立派に保つことを同様に誇りに思うべきであります。

家族の祈りは、家族の団結にとってひじょうな力になります。食卓の祈りをささげること、家族が共になって祈ること、規則的に一しょに礼拝に行くことなどは、家庭の信仰生活を高い水準にひきあげるものであります。努力して信仰の道に導きをする両親は、その子供たちの心に信仰をうえつけます。民主的のやり方が強調される家族の夕べを司会するとき家族の結びつきは一層強くなります。家族の者の誕生日とかそのほかとくべつな場合にお祝いをしてあげることを推薦します。家族が一しょに休暇を楽しむことは幸福な思い出となります。しかし、これにも例外があって、父と母とは時々自分たちだけで休暇を楽しむべきであります。責任と義務、楽しみと悲しみ、成功と失敗、これらを家族の者が一しょになって味わうなら、家族は何にも敗れない要塞となります。父母と子供たちが一しょになって高い目的のために働らくときだけ、神のみこころのように家族を保持することができるのを忘れてはなりません。

ある求道者への手紙（二）

「秋来ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞおどろかれぬる」という和歌と「秋来ぬと目にさや豆の太りかな」という俳句とくらべてみて大へんおもしろいと思いました。和歌の方では「目にはさやかに見えねども」と言って、秋がもう来ているということが自分の目ではっきりと認識することはできないが、風の音、それもただ風の音というだけでなくて、天地の間を吹きぬけて行く風の音の調子ではっきりと秋を感覚したと言っています。

ところが俳句の方では「目にさや豆の太りかな」と、さや豆の「さや」とさやかの「さや」とをかけて、秋がもう身近かに来てしまっていることを「さや豆の太りぐあいで」はっきりと「見た」と言って居るのです。

秋は見えるものか見えないものか。一方ではどうも「はっきりと見えない」と言っているのに、他方では「はっきりと見た」と言っているのですから、この勝負はどうなるのか、物事を右か左か、勝ちか負けか、はっきりとかたをつけなければ承知をしない人にとっては難問になることでしょう。

ところで、狂歌の名人太田蜀山人が近江八景をよみこんでいただきたいと言われてただちに「のせたからさきはあわづかたたのかごひらいしやまやはせらせてみい」とよんで絶賛を博しましたが、いや三十一文字では多すぎる十七字でけっこう「七景は霧にかくれて三井のかね」と一句ひねって、どんなもんだいと鼻をうごめかした俳人があったと言います。

「七景は霧にかくれて三井のかね」、これでは八景の一つも目に入りません。七景は霧の中に沈みこんでしまって、あとの一景もただ鐘の音によってだけその存在がわかる次第です。しかしその音を聞いただけで「あ、三井寺の鐘の音だ」とわかる人にとっては、一つも目に入らなくてもそこに八景がちゃんとあるのです。

さて、秋には秋の顔があります。木々のこずえも次第にうら枯れて、緑の濃かった山々も何となく灰色にかすみ、山脈のいただきに

は白いもののおとずれが見える。隣りの里へ行く峠道にはすすきの白ほが風になびいて、夕日の色の紅いこと。

ビルの谷間のアカシヤの一枝にも秋の来たことを告げるしるしがはっきりと見えます。まして元気の好い若い人たちの目はくだもの屋にならぶ梨、柿、ぶどうの「オンパレード」にひきつけられて。

しかし不幸なめくらの人たちはこのような秋の顔が見えません。見えないから秋はそこに来ていないでしょうか。見えなくても秋はそこに来ているのです。夜になると台所のすみで「ツヅレサセ」となくこおろぎの声、庭の松の枝をならして行く風の音、中国の人が「金気粛殺の候」と言ったように身内のひきしまる冷気、これらはみんな秋がそこに来ていることを知らせているのです。

今私は「金気粛殺の候」というむつかしいことばを引き合いに出しましたが、それは秋がそこに来ていることは目に見えなくても、音が聞えなくても、秋特有の感じで以て知ることができるということを言いたかったからです。この中国のむつかしい字の意味がよくわからなくても、見ているうちに何となく身内のひきしまる冷めたい感じがします。それ、それが秋の感覚なのです。

中国に「少年老い易く学成り難し。一寸の光陰も軽んずべからず。いまだ覚めず池塘春草の夢。階前の梧葉すでに秋声」という学問をすすめる詩があります。「ぶらぶら遊んでいるうちに、もう庭の青ぎりの葉が秋のきたことを告げているぞ」というほどの意味ですが。ここに言ってある「秋の声」は春夏秋冬の中の「秋の声」であると同時に「人生の秋の声」でもあります。秋は四季の中にもあるし、人生の中にもあるのであります。

そうすると、さや豆が太ったり、すすきのほが白くたったり、青ぎりの葉が風に音を立てたりする時ばかりが秋ではないようです。「秋」の本質は目に見えたり、耳に聞えたり、肌に感じたりするものよりはもっと深いところにあるような気がします。

「ヘブル人への手紙」第十一章第三節にある「見えるものは現われているものから出てきたのでないことを、悟るのである」という聖句は私たちに深く考えさせるものを持っています。では、また次の日曜に教会でお会いいたしましょう。お元気で。

子供日曜学校ガイド（十一月用）

十一月二十二日は感謝祭です。

貴方の支部では何か、特別なプログラムを考えていらっしゃいますか？

クリスマス・復活祭・母の日等の行事と並んで、子供の日曜学校で感謝祭もとりあげてみました。

これらの行事を通して、子供たちはその日の意義をおぼえ、感謝し、また特別な歌をうたって、よりよい安息日を過すのでしょう。

感謝祭――これは今年も無事に、こんなにたくさん、立派な農作物を得られましたと、神様に感謝する日であります。

西洋では、この日はとても楽しい日だそうです。テーブルの上には、たくさんの、よく実った、木の実、とうもろこし、カボチャのパイ等が美しく盛られ、また七面鳥のお料理がクリスマスより一足先きにお目見えするのです。日本にも、これと似た様な行事がありましたネ。

感謝祭特別プログラム

開会の歌　#13（短いため二回うたいましょう）

祈　り

お話（五分）子供の日曜学校管理者或いは責任者

テーマ

㈠感謝祭の説明

㈡神様の自然に対する愛（たとえば四季の移り変り等）

㈢その他、この日にふさわしい話を選ぶ

（以上の中、一つを行う）

分　級

上　級―子供たち自身の手で植物を育てた事があるか無いか、その経験談

中　級―〃　〃　〃

下　級―お百姓さんの一日を話し合う

活　動―合同でも良いし、別れたまゝでも良い。出席する子供たちの年令を頭においていづれかに決める事。

別れたまゝでする時の参考

上級―地図を使って（日本地図）の地方で何を一番よく作っているか（農作物に限る）

中級―想像出来る範囲で農作物の絵をかく

下級―童謡の中から選んでうたいましょう

お百姓さんごくろうさん、かかし等

閉会の歌　#50

祈　り

以上は一つの提案ですから、それぞれの支部で豊かなプログラムを組まれます様、希望します。活動にしても、やりっぱなしでなく、必ず、こうだから―こうなのだと、先生が最後にまとめてください。

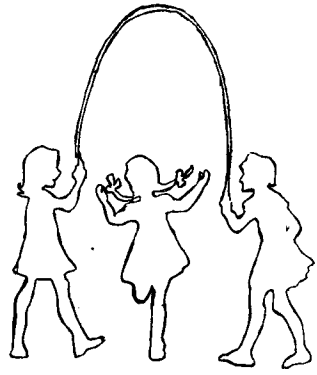
出席表をつくりましょう

こゝに載せましたのは、東京南支部の先生方がお作りになった物で、とても可愛らしいカードです。既成のそれよりも、ずっとすばらしいではありませんか。何よりも、先生方の熱心さが愛が表われています。子供も楽しそうに、出席した日付の模様を色をつけておりました。

皆さんの支部では、どんな出席表を持っていますか？

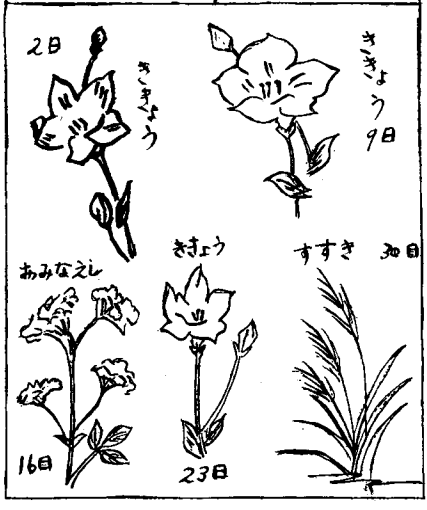
面倒でも先生方、どうぞ作ってあげてください、それから子供たちの住所録を一冊作りましょう。久しく教会に顔をみせなくなったお友達に、どうしていらっしゃいますか？と皆んなでお便りを書くために、もう、すでに作ってある支部は、フルに利用しているか、どうか調べてください。

末日聖徒イエス・キリスト教会
子供日曜学校

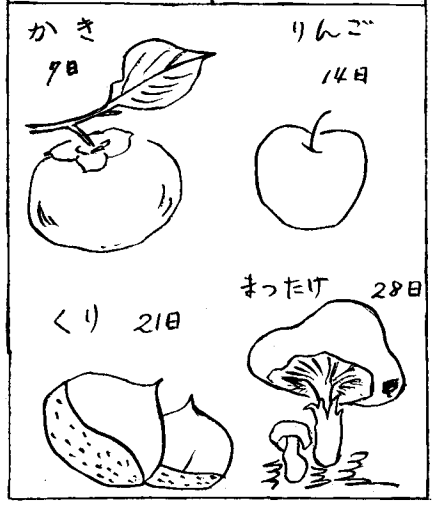


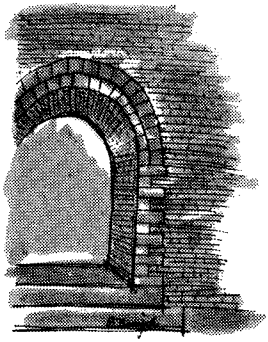
何ごとでも人々から
してほしいと望むことは
人々にもそのとおりにせよ。
マタイ七・十二

9がつ	あきのはな



10がつ	みのり



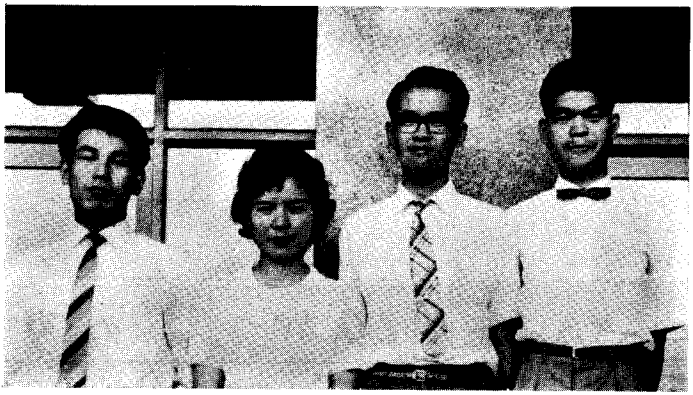


日曜学校ガイド

11月用

伝道部日曜学校会長会組織される

先月の「聖徒の道」で予告したようにこの度新しく伝道部の日曜学校会長会がアンダーセン伝道部長の聖任により八月組織されましたので御報告致します。



小林、鈴木、上野、山田

会　　長　上野道男兄弟
第一副会長　山田五郎兄弟
第二副会長　鈴木百合子姉妹
書　　記　小林義生兄弟

（尚今まで鈴木姉妹が子供日曜学校指導者でしたが今後この役職はなくなるわけです）

この伝道部は毎年三十％ほどの猛成長率で発展致しております。それにつれて日曜学校も仕事が倍増致し今までのように二人ではとてもやっていけなくなりました。そこでここ二三ケ月の間、適当な人材を物色（？）致しておりました所、東京北支部の山田、小林兄弟のすばらしく有能の士を得たわけです。

仕事の内容は支部日曜学校会長会の職務とほぼ同じで会長は伝道部の方針、特別プロの作成など、第一副会長はテキストの飜訳、教師養成会の監督など、第二副会長は主に子供の日曜学校の指導を、書記は記録の整備、中央管理会へのレポート作成などにあたらす。

ここで簡単に会長会のメンバーを紹介致し

ましょう。

第一副会長、山田五郎兄弟

前、東京北支部長会書記を二年間ほどやった後三年前専任宣教師に召されて伝道、そのすばらしい信仰と実行力及びアメリカ人顔負のペラペラ英語力を買われて最後の数ケ月は巡回宣教師として北海道以外は全国の支部は訪問済みである。この貴重な体験と豊かな趣味をいかに日曜学校発展に寄与するか今後大いに期待される。

第二副会長、鈴木百合子姉妹

前、東京中央支部扶助協会々長を永い間果し、去年四月伝道部子供の日曜学校指導者兼東中央地方部子供の日曜学校指導として選ばれる。今度の伝道部日曜学校組織により役職の名は変ったが仕事の内容は前とほぼ同じです。彼女のユーモアと機知にあふれるすばらしい演説は特に東中央地方部では定評のあるところ、又聖徒の道の子供の日曜学校ガイドに度々載る如くそれで飯が食べられるほどの詩人です。

書記、小林義生兄弟

前、名古屋支部会員、現、東京北支部日曜学校会長で昼は「聖徒の道」の編集、テキストの校正、伝道本部のお手伝いをし、夜はデザインの勉強をしに大学へ通っている真面目な学生、方向違いのテレビの組立などの余技ももっている若手のホープ。

会長、上野道男兄弟

前、東京北支部第二副支部長、東中央地方部MIA補助をして二年前東中央地方部日曜学校指導者兼伝道部日曜学校指導者となる。ソニーの電気技術者として多忙な生活を送っている。愛妻家、子ぼん悩であまねく有名。

というわけでよろしく御期待のほどをお願いします。尚ついでに鈴木姉妹、小林兄弟は**独身**です。

次に山田、小林両兄弟の挨拶を聞きましょう。

聖徒の道の紙上で兄弟姉妹の皆様にお逢い出来ます事を感謝致します。おそらく此のページを読まれる兄弟姉妹の中には、私の知っている方が多勢いらっしゃる事と思います。今度私は教会の中で非常に大切な役割を持つ日曜学校の仕事をする事になりましたので、皆様の協力を期待しています。

最近の日本語は大変かわって来ています。どうして多くの外国語が私達の日常生活の中に入って来ましたが、その中の一つにパート（PART）なる言葉があります。もともとパートとは、一三世紀またはそれ以前のフランスから根を発したものですが、私達は此のパートなる一言葉を色々に利用しています。例えばパートタイム、コーラスで各パートに分れる筈ですが、此の単語は全体を分割したその一部分と言う意味なのですが、私は今日此々で英語について話すつもりではありませんが、時として私達は全体で完成されるはづのその一部（パート）でありがちなのです。と云うのは自分自身はフル（充分）な末日聖徒でしょうか、それともパートタイムの末日聖徒なのでしょうかと云う事について考えて見て下さい。

パートタイムの聖徒の例は、モルモン経の中でアルマがゾーラム人に福音を伝え様として出掛けて行った時の中に見る事が出来ますアルマは「ゾーラム人はこの様に一々感謝してから各々の家え帰ったがまた此のやり方で感謝を捧げるために聖い台え集まって来る迄は少しもその神について言わなかった（アルマ書三十一章二十三節）これは著名ないわゆる日曜クリスチャンの例です。十戒に安息日を聖く守れとありますが、日曜だけのパートタイムのモルモンで良いと云うのでもなく、神の与えたもうた誡命は日曜日だけの為でも

ありません。安息日を守れば次の日曜迄の一週間全く神の事を思わずとも日曜に一週間分の誠命を守って仕舞う事が出来るでしょうか？　なぜ一日だけでは不充分なのかを一緒に考えてみましょう。日曜学校は私達に一週間のしめくくりをさせ次の7日に必要な心の糧を与えてくれる大切なものです。アルマ書三四章一七節―二八節迄にある様に、牧場にいる時は家畜の群について祈れ、家にいる時は家族全体について朝も昼も晩も祈れ、敵の力を防ぐことが出来る様、一切の美しいことに敵対する悪魔を防ぐことが出来る様に、田畑の収穫が豊かである様に神に祈れ。又、一人で部屋にいる時も秘密の所にいる時も野にいるときも心にあることをうち明けて、自分のためにまた自分のまわりの人々の為を思ってたえず心の中で主に祈れ。此の様に常に、如何なる時でも何時でも祈れと教えられています。

もしも貴方の時計が一二時から一二時一分、二分と六〇秒ごとに一分づつ進まずに、次の十二時になってしまったとしたら一体此の時計は何時間事に動くことになるのでしょうか？　どんなこわれた時計も日に二度は正しい時を指します。所では私達は故障して動かぬ時計になりがちですが……人の生くるは、パンのみに由るにあらず神の口より出ずる凡ての言葉に由ると云われたイエスの言葉はあまりにも有名でありますが、日曜学校は正にこのパン以外の糧を与える所です。良く物事は始めと終りが大切だと人は云います。終りであり始めである一番大切な日を憶えていようではありませんか。

教会の中で非常に大切な機関である日曜学校を増々すばらしいものとする事が出来ます様に皆様の協力をお願いいしします。

山田　五郎

このたび伝道部日曜学校会長会書記に任命され神様の大切な仕事を共にできる喜びを感謝しております。

伝道部長の按手が終り上野兄弟から手渡されたメモには、九項目にわたって色々と仕事の内容が書いてありました。本部へのレポート提出、記録簿の保管、作成、基金の支出明細、テキストの出版、etc……

私にとってどれもこれも重すぎるほどの責任ですが、いっしょうけんめい努力していきたいと存じます。私たちの伝道部が大きく飛躍しようとしている現在、会員一人一人が手をつなぎ、心を合せて前進進歩することは非常に大切なことだといわねばなりません。そういう時に当っての私たちの努力こそまた期待されているものと思います。日曜学校の組織が一層発展するためにみなさまの協力をお願いいしております。

小林　義生

会長会教師の方々へ

二分半の話

他の教会へ行ったことのある方は知っておると思いますが、教会では殆んど牧師があるいは神父が長に説教をします。彼等は経験豊かでそれを職業としておりますので、準備された感動的な良い話をします。それに反して私達の教会で全会衆に向って話される二分半の話はどうでしょう。かなりお粗末に取り扱われ過ぎてはおりませんか？　準備の利いた良い話は我々平会員にとっては余りに難しいのでしょうか？　いいえ、話が教会の標準に従ってなされるなら、むしろ牧師にはない日常の生活体験を通して身近な、直接実生活に益する二分半の話ができるはずです。それでは教会の標準を調べてみましょう。（髞訳）

日曜学校の最も重要な機能の一つは、教会の会員にもっと効果的な言語の表現方法を教えることである。教会の会員は、家族の人達

や隣人又は友人達に効果的に福音を教える必要がある。教会の会員達は皆、宣教師であり、教師である。すなわち、常に、教え、説教し、祈り、福音上の質問に答え、クラスの討論会に出席する機会に恵まれているわけである。

毎週日曜日には、二人の人に日曜学校で話をする機会が与えられる。この二つの話は二分半の話である。子供の日曜学校では、子供達も同様な機会に恵まれて話をする。子供の日曜学校では、二分半の話を使用するではなく、短い言葉か、若しくは子供の能力に応じて、暗記出来る様な文章を使用する。

これが適切に行われれば、教会の何千という多くの人々は、毎日曜日、福音に関し有意義な話をする機会に恵まれ、同時に、話す能力と日曜学校の霊性と増大をさせることが出来る。

＊二分半の話を如何に展開させるか

日曜学校管理会は、少くとも三ケ月前に割り当てをし、どのクラスの人達が二分半の話をするかを決定しておく必要がある。この割り当てをする時に、話の題目を与える必要はない。何故なら、話す人は、その与えられた題目が気に入らぬ場合もあるし、又それに関し何ら知識を持たぬ場合もあるからである。

話をすることによって大きな学習効果をあげることが出来る。レッスンにある思想や考えを完全に知ることが出来た生徒は必ずクラスの人達の前でそれに関する話を喜んでする。自分にも話す機会が与えられるのだと知ることにより、生徒は、もっと注意深く、もっと深く興味をいだく様になるし、又勤勉に且つクラス活動にも、より活潑に参加するようにもなるであろう。それ故に、学習はもっと効果的に行われるようになる。

日曜学校の礼拝の時間になされる二分半の話は、クラス内で何回もなされた話が良い。この二分半の話の割り当ては、教師と生徒とが、充分な準備の出来る様に前もってなされるべきである。そうすれば教師も生徒もレッスンの進行に従い話の題材となると考えられる「アイデァ」をあらかじめ集めておくことが出来る。

クラス内の二分半の話は、新しいレッスンの一部を提示するための効果的な方法ともなり得る。故に、クラスの人達は、新しいレッスンを展開させるために活潑に参加することが出来るわけである。

教師は、しばしば前に学習したレッスンを中心として二分半の話をクラスの中でするよう、生徒に割りあてをなすべきである。これらの話は、レッスンの復習となるばかりでなく、思想を述べる能力を発達させる良き機会を生徒に与えることになる。

生徒に、知識を与えるのみではなく、その知識を表現する方法を教えることは極めて重要である。他の人にうまく伝えられない話はその話の価値を失ってしまう。それ故に、毎日曜日、教師は生徒に福音を教えるばかりでなく生徒がその福音に関する話を上手にすることが出来るように訓練させることが必要である。教師は、これに加え、効果的な話をするために適切な方法を工夫し、それを使用する仕方を生徒に教えるべきである。考えや使用される言葉は、話し手にとって自然であり親しみ易く、且つ理解し易いものでなければならない。すなわち、話し手は、自分自身の言葉で語らねばならない。従って話をする人には、時間の余裕を与えて、彼自身の話の資料を自分で準備させねばならない。例えば何ら訓練や助力を与えられないで、話を頼まれた子供は、自分の求めている助力と援助を与えることの出来ないような大人の方に助力を求めるかも知れない。この人は、しばしば子

供に、思想や考えを紙に書いて教える。子供は、単にそれを読むだけである。こんな場合は、子供に極めて不正なことを教えていると云わねばならない。何故なら、この方法は子供自身の経験、思想をだいなしにし、考えのまとめ方、及び考えを表現する機会を全く失わせてしまうからである。

時折、全く準備をしない子供が何ら助けを受けずに自分に割りあてられた話をしようとする。大抵の場合この子供は全く準備をしない。それ故に、この子供は極めて不利であり時折実際は話し得る事柄でさえも結局語ることが出来なくなってしまう。前もって知らせを受け、自分自身にも興味のある題について話をする様に頼まれた生徒は、その話す機会を最大限度までに展開させることが出来る。この生徒はまず教師から教えを受け、次にクラスの他の人達の語るのに耳を傾けることによって良い点を学び取るように心がける。この時には、話すことは極めて容易になり、自分にも極めて楽しいものとなる。

すべてのレッスンには、クラスの生徒が話の題材として取りあげ、クラスの中で語ることの出来る問題が多くある。例えばあるレッスンには、宣教師の仕事に関する事柄が載っている。クラスには、伝道に出ている足をもっている生徒がいて、伝道の仕事に関して有意義なる事柄を知っているかも知れない。この生徒は、恐らく、宣教師の仕事の必要性か又は、どのように宣教師が家庭に影響を与えたか等について語るであろう。またこの生徒は、宣教師の仕事の利点や二三の偉大な宣教師イエスやパウロなどについて語るかも知れない。このようにして、クラスに於ける二分半の話は、毎週のレッスンを生徒の生活の一部分とし、又同時にクラス活動を展開させることに於て、教師に大きな助けを与えてくれるものとなるであろう。

生徒は、家庭に於ても話をすることが出来る。そしてやがて、日曜学校の礼拝の時間で一度、二分半の話をする機会に恵まれると、それが極めて楽しい経験となって、毎回でもくり返しやりたいという気持にかられるであろう。こんな時には、自己の表現能力が拡大されるばかりでなく、自己の興味、証詞、態度、及び福音に関する知識がますます増大するのである。

二分半の話は、習得したレッスンの内容と密接な関係を持たねばならぬ故に、二分半の話は、クラスの教師にも大きな関連がある。この理由で、二分半の話をお願いするために、特定な話し手だけを選び任命することはあまりすすめられる方法ではない。

最後に「聖徒の道」の日曜学校ガイドで度々言っておることですが二分半の話を割当てるとき、注意しなければならないことを列記します。

1 原稿用紙を是非渡して(四百字詰二枚)それまでまとめてもらうこと——準備のされた話と二分半を越えない二つの目的のため。
2 二分半を過ぎないこと。
3 主題は一つであること。
4 準備のしなかった言いわけ、割当の機会を感謝するなどの前置きは不要。
5 全会衆が聞えるような大きな声ではっきりと話すこと。
6 説教台の前で話すこと。
7 単なる世間話であってはならないこと
8 祈り会は出席すること。
9 求道者でもかまわないこと。
10 おもしろくて興味をひくような話題を提起して会衆の注意を呼ぶこと。——日常生活より得た教訓、クラスで学んだレッスンで印象的な話。教会に始めてきたときの印象など話題はいくらでもあります。尚始めてこの責任を受ける人には、どういう話題がよいかある程度指示してもよいでしょう。

MIA リーダー

十一月一日「討論会」

Mメン・グリーナーのクラスに於いては、討論会が行われます。この日の為にあらかじめクラスの人たちの意見を聞き議題を定めておくと良いでしょう。その場になって、「さて今晩は討論会ですが、議題は何にしましょうか。」等と言うことがない様にしたいものです。それに司会者もクラス・リーダーでなく他の人を選んでおくと良いと思います。早いうちに議題が決定しますと、ポスターを書いて、MIAの時や、日曜学校の時に壁にはっておくと、その議題に興味を持っている人、またその問題について他の人たちの意見を聞きたいと思っている人たちがMIAに出席する機会をつかむことにもなるでしょう。討論会に於いて、決して、無用な争論にならない様に司会者やクラス・リーダーは気をつけましょう。いつも中心主題から離れない様に、また結論は、あやふやにしない様に、その日の結論がつかない程に間口を広くしてはいけません。今日MIAに出席出来ても、来週はやって来れない人がいることでしょう。もしその様な人が結論のない討論会に出席して帰宅する時、何と無意味な時を過したものだろうと感じるでしょう。或は、果てしない疑惑や、多くの疑問を持ったままで頭の中は混乱し、床に入ってからもなお考えつづけると言う様なことになりかねません。次の時までに考えておくと言う様な宿題ならともかく、討論会に於いては、まとめが出来ない様な司会者は落第です。皆の意見を上手に聞き出し、結論の、まとめ役をするのが良い司会者です

十一月一日「私にとって神聖なるもの」

エンサイン・ローレルの手引き百七十二頁を参照して下さい。クラスの全員が「エンサイン・ローレルの手引き」を持っているかどうかしらべて下さい。

「名誉の夕べ」　第三夜

エンサインは「エンサイン・ローレルの手引き」の七十頁を参照して下さい。クラス・リーダーはYM会長が行います。

十一月二十二日「スポーツの夕べ」

（エンサイン・ローレル）

この日、エンサイン・ローレル・クラスに於いて、レッスンはありません。〝スポーツの夕べ〟になっておりますから、前もって良く準備しましょう。レッスンの時間だけでは短いですね。そうです。話題の時間も使って良いわけです。この夜の責任はYW副会長とYM会長にあります。夜ですので、かぎられ

たスポーツになりますが、卓球台のある支部は、卓球大会を開くのも良いでしょう。紅白試合にするのもいいですし、また卓球入門として、まだ卓球をしたことのない人たちに上手な人が教えてあげるのも良いでしょう。或は体育館を借りることができればバレー・ボールや、バスケット・ボール等も出来ますねまた近い支部では二つ或は三つの支部のエンサイン・ローレルが合同して、スポーツの夕べ〟を開くのもいいですね。そうすることによって、他の支部のエンサイン・ローレルと知り合う機会もあり、また経済的には体育館等の使用料を幾つかの支部で、分割出来ますので、少くてすむと言う利点もあります。エンサイン・ローレル・クラスのリーダーは、皆の要求を知って良い計画を早く立てましょう。

第二課　あなたはあなたの運命を決める事が出来る

多くの人たちは、日々我々ではどうする事も出来ない力で押えられて生きていると信じている。そのうちには経済力、政治力或いは軍隊の力と云った非人間的な力もある。闘い戻る拠点も無く、誰ももはや自分の運命を決める事も出来ない。こんな不健全な精神が若者たちを捉え、失望し悲しみのベンチにうずくまらせている。……大学へ通う年代の若者には与えたくないものである。この現象は成人にも見られ、トランキライザーや催眠薬の急激な使用の増加により、逃避しようとするこの種の薬物は彼らにとって有害であり、それらに耽溺する事で心の緊張から逃れようとするものである。我々はとかくすると心配事や苦痛から逃れようと甘い忘却の誘惑にひきつけられる。これは救い主の云われた言葉の一つ「この世が与えたもの」であり、神から出た平安ではない。

誰も自分と共にはいない

再びパウロに戻って彼の偉大な模範を眺めよう。彼の全生涯は自ら「傍の茨」と呼んだ病弱な身体のわずらいであった。彼は多くの人々に誤解され、幾多の国で窮乏を味わった。また、王や支配者達の前で鞭打たれ、恐れる事なく真理の証詞をした。彼は伝道を始める前に次のように云った。

わが始めの弁明の時、誰も我と共に居らず全て我を見捨てたり。然れども主我と共にありて我を強めたり。全ての異邦人の聞かんが為なり。かくて我獅子の口より救い出されたり。（テモテ後書4章16—17節）

人がパウロのあの勇気と信仰の源を探る時、パウロがダマスカスへ赴く途中、主の御光を見て仰ぎ、御声を聴いた事を思い出す。これがパウロと同じになれる始めである。後になってこう説明した。「活ける神の御手に陥るは畏るべきかな」（ヘブル書10章31節）一度、神から得た信仰が個人の心に芽生えると、荒野や海の果てまで赴かせ、信仰の成就するため病み、死のうとさえする。「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。」（ヘブル書11章1節）

証人の雲のごとき集り

新約聖書は信仰の原動力となる偉大なメッセージの源である。パウロはこの目に見えぬ力を指して「証人の雲のごとき集り」と云い、この信仰が幾世紀もの間、多くの男女を支えてきたのである。（ヘブル書11章1〜40節）

人	信仰を通して成長した事
神	この世を創り給う。
アベル	カインより善き捧物をせり。
エノク	神に挙げられ、喜ばれたる者
アブラハム	遠き国に住みし。信仰の父となれり。子孫に祝福を受けたり。

ノア　洪水より家族を守れり。正しき者の世継ぎとなれり。

サラ　年老いて一人の息子の母となれり。息子を通し、選ばれし者の母となる。

イサク　大いなる約束をもって息子等は祝福されたり。

ヤコブ　大いなる約束をもって息子等は祝福されたり。

ヨセフ　イスラエルの子等の象徴となる。

モーセ　ファラオの息子と称ふるを拒みたり。エジプトを逃れ、エジプトの兵士等を呑みし紅海を渡れり。

信仰を得るには

神やキリストの福音に信仰を得ようとするには次の事がらをしなくてはならない。

1. 生きてまします神の御手に身を委ねる。

パウロはかって次のような言葉を云った。「真の生きてまします神に信仰を持つ事は畏ろしい事である。」一度、神の御手に我が身を委ねれば、地球を創り給いし父の子としての関係を結んだ事になるが故に畏ろしいのである。我々は主の許に近付き、信じなければならない。主を熱心に求める者に大いなる祝福がある。我々はこの戒律に生きねばならない。亦、主に学び、耳を傾け祈らずに身を委ねてはならない。神を知らねば、神に信仰を持つ事が出来ない。我々は深く知り、考えに従って生きている。それと同じく若し、天と地、全て諸々の物を創り給いし神を知らずば、証詞も生まれない。信仰は知識の後に生まれてくるものである。

〝パウロは我々を戒めて云った。信じようとしない者を如何に主に従わせられようか。福音を聞かざる者を如何に信じさせ得ようか。福音を説く者なきに如何に説き得ようか。

さらば信仰は聴きて来たり、神の御言葉に依り聞かざる。

最初、信仰は主の御言葉を知ろうとする強い燃えるが如き欲望から始まる。次に、主を知る者に耳を傾け、天の父なる神、農夫の子のジョセフ・スミスの言葉を知って、神の御福音を信ずるに至る。ヤコブ書1章5節を読みなさい。

2. あなたの信仰を試みてはならない。

神の御心を思いはかるのは妥当でない。誠心誠意主なる神を信じてから試みようとする。信仰の光は日々の生活にあってのみ、ますます強く、大きくなっていくものなのである。この世は天に在します父の準備された世であり、試しの地である。この美しく、力強い価値ある宝石—信仰は試錬を経てのみ得られるのである。あなたの信仰厚き祈りは病いの癒しに顕われるかもしれないが、もっと大切な事は病いの癒しではなく、信仰の表わしである。それは知恵の言葉の中にも表われている。知恵の言葉を守る事は単に健康を保持する以上に価値あることなのである。什分の一の律法に従う事もあなた方が大いなる約束のあるこの律法を与え給うた神を信ずるかどうかの試しなのである。あなたは天に在す父が安息日の神であると信じますか。あなたはこの日を聖なる日と信じていますか。これらの質問に対する解答は決してあなたの信仰を無にはしない。信仰は真に信仰に生き、実践してこそ本物となるので、その試しこそ神の真の戒律としてあなた方に密接な繋りを持っているのである。

3. **あなたの信仰を養わなければならない**

信仰は精神的な経験である。身体は精神の

宿る処である。我々は自分の身体を大切にして、損わないように食物を摂り、衣服を着用する。精神は身体と合わさって完全なものとなる事が出来るのであって、もしそれが目に見えるものであれば、肉や骨のような実際の物質と云えるであろう。そして日に三度、或いはそれ以上養なう必要がある。ヤコブ書の中に信仰を身体と引き離して考えている馬鹿げた人々の事が書かれてある。

働きを通して信仰は完成されるのであり、働きの中には他の人たちに対する我々の信仰の表わし、必要ならば戦い、死ぬことすら含まれているのである。我々は二、三の事がらに信仰深くあれば、それらは我らの方に近付き、やがて全ての物を通し、信仰深き支配者として呉れる。家庭生活の信仰は新約聖書に述べられてあるようにこの種の信仰である。信仰ある共同社会—教会—としっかり結び付き、集会に出席せねばならない。此処で祈り、歌い、神の戒律を教え、学び、欠点を述べ合い、日々の信仰の喜びを語り合う、そして、聖餐を受け、神の御霊の御助けによって、何時迄も信仰を持ち続けていこうと云う証詞を持つのである。これらは信仰厚き家族を養い、強めるパンである。

信仰は自尊を促し、疑惑に橋を掛け、恐怖を取り除いて呉れる。神は天に在し、彼の子供達を見守っていらっしゃる事を肝に銘じておこう。亦、光明は暗黒から人類を導き出し善は悪に打ち勝つことを覚えておこう。信仰は我々の責任の回避を阻止し、それ自身、人生の本質となるのである。

討論のために

1. 信仰を築く上の段階を述べ、自分の意見を加えなさい。
2. 什分の一の信仰は何故に什分の一からもたらされる経済的利益より大切なのであるか
3. 日々の生活の中で、信仰を培う事がらを云って御覧なさい。

第三課　最初の、そして最大の義務

この世には沢山の驚くべき物事がある。多くの経験、多くの声、我々の注意を競って惹く数多くの計画、従順であるべき法律。最初にあって、全てを抱括する人生最大の規則は何であろうか。ある教法師はイエスを試みようとして次の質問をイエスに向けた。〝第一の大いなる誡命は何であるか〟真理を全て統括し給うイエスは次の様に云われた。

〝汝心を尽し、精神を尽し、思を尽して主なる汝の神を愛すべし〟。これは大にして第一の誡命なり。第二もまた之にひとし。〝おのれの如く、汝の隣りを愛すべし〟律法全体と予言者とは此の二つの誡命に依るなり。（マタイ伝22章35～40節）

以上の聖句は我々の人生に深い意味を与えている。パウロもコリント人にこの最初の教えを語っている。（コリント前書13章1～3節）もし彼が今日いて、我々に語るとすれば次のような言葉を云うであろう。

全ての世の人達が耳を傾けるように天使の声をもって話す事が出来たとしても、……

時に与えられる素晴しい予言の言葉を話せたとしても、……

山をも動かす程の強い信仰があっても、…

神の不思議な御わざを解き明かす程に祝福を与えられていても、……

世界のあらゆる知識を与えられていても…

そして、あなたの肉体が焼かれたとしても神とあなたの隣り人を愛さなくば、全て無に等しいのである。これ等は非常に厳しい、而も考えさせられる事である。愛が全てに優先することから出発しているのであり、これ以外は無いのである。

愛の要素

神の愛、同胞の愛とは一体何であろうか。辞書をひくと、愛は他の人に対する愛着、崇敬の念、愛情、友愛等と書かれている。パウロはそれを定義するのに多くの素晴しい語句を使っている。（コリント前書13章4～8節）彼が使っている言葉に慈悲があるが、これは他の聖句では「キリストの清い愛」と定義されている。（モロナイ書7章47節）

パウロの解釈　　説明

親切である。　他の人に思いやりを示す。
羨やまない。　他の人に人生の善き事を不満に表わさない。
誇示しない。　思わせ振りや自己中心の行動をとらない。
不自然な振舞いをしない。　愛は時に臨んで適切な行動をとる。
安易に怒らない。　心をいつもおだやかに保たせておく。
人の話を聞く　常に金槌であってはならない。金とこになりなさい。

その他沢山の定義がある。各自で表を作って御覧なさい。

神の御教を得る為の手引

我々は知らない人を愛す事は出来ない。(1)主の御教えを学ばず、人の為になしたる事を理解するのに祈らず、また(2)主の誡命が何であるかを知らずに主を知る事は出来ない。使徒ヨハネは此の考えを次のように書き記した「われ彼を知る、と云いてその誡命を守らぬ者は偽者にして真理その者になし。その御言を守る者は誠に神を愛しその者全うせらる。之によりて我ら彼に在ることを悟る。彼に居ると言う者は、彼の歩み給いし如く自ら歩むべきなり」（ヨハネ第一書2章3～6節）

新約聖書は神の眼にあって我々一人一人は大切な子供であると教えている。我々は天父なる神と同じに形どられて創られたものである。我々が有するこの肉体と精神を考え、神に対する心は息子、娘達の父に対する心と同じである事を知れば、己れ自身を愛するように隣り人を愛す事が出来る。我々が隣り人を神の子供達であるが故に愛せば、我々の神の愛をもっと広く理解する事が出来る。

神の愛は各人や隣り人のものとそれ程変っている訳ではない。隣り人を嫌ったり、貶したりせずに自分自身を憎んだり、軽蔑したりは出来ない。若し我々が尊敬の念を持たずに隣り人と接したなら、誠心誠意で神を愛す事は出来ない。ニーファイが神のことを知ろうとして熱心に祈りをした時、彼は大いなる示現を見た。（ニーファイ第1書11章21―23節）

この、神の愛の例証は生命の樹であり、我々の生命、キリストの生命の樹でもある。これは只、日々の生活の行いに見られる生命の樹の果実を味う事から此の愛を知る事が出来るだけである。

「わが誡命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛するものなり。我を愛する者は吾が父に愛されん。我も之を愛し、之に己を顕すべし」

討論のために

1全ての誡命、予言は何故に此の一つの大きな誡命、神の愛に依るものであるのか。
2次の言葉を話し合ってみよう。「私は自分自身のように隣り人を愛するが、それを為すが故に自分が嫌いである。」
3自分の人格の尊厳さ、神聖さを保っていく方法を述べ合いなさい。
4生命の樹の果実とは何であろうか。

（佐藤襄二）

（608頁に続く）

伝道本部だより

バプテスマ　一九六二年七月

阿倍野
桑原佳子　竹林一男
岡野ツル子　山本秀樹
岡野正子　本間多まき
旭川芳本章子　佐藤雅子
畠山茂樹　吉田英
南夕起子　小林政雄
中川優子　緒方瑞代
新保守　佐藤操
福岡
西田順一　今井繁寿
渡辺シズ子　久保田弘子
群馬今村洋子　慶野弘子
藤井重男　宮本幸子
桐生千代子　丸山東子
市川皓子　須具志う子
岡田優彦　原田嘉行
佐藤諸子　安久津嘉信
広島
藤甲節子　江野脇千秋
岡宏孚　長尾保子
沖秀子　志田原和子
沖寿述　吉田美佐子
奥田信夫　村川良子
高島照子　早川賢　山口ヤス子
札幌
高橋尚武　許田芳子
山内三枝子
葉愛子
葉黎子
東京西
藤田憲子
堀フミ江
小林政雄
緒方瑞代
佐藤操
三浦正
村光子
山形
好子
新保喜枝
伊藤
柳井
上野幸子
久保田弘子
兼政貞子
宮本幸子
大田忍
普天間
具志堅美代子
比嘆武雄
石原末子
金城仁清
幸地謙信
幸地絹枝
幸地静子
古波蔵誠規
那覇
鈴木昌子
村川良子
許田芳子

執事
タケウチ　ヒロミ（福岡）
サエキ　ツヨシ（福岡）
ヒグチ　ケイイチ（群馬）
カノ　クニオ（群馬）
クノモト　タダオ（広島）
ニイイ　ヒデハル（広島）
ツボウチ　オサム（西ノ宮）
ヤマダ　シチシ（岡町）
アンドオ　ヒロミチ（岡山）
エノモト　シュンジ（東京北）
カンザキタケジロオ（東京北）
アサノ　トキオ（東京南）
イトオ　ヨシアキ（東京西）
ミナミサワテルユキ（東京西）
ウチヤマ　マサノブ（東京西）
ウチヤマ　ハルユキ（東京西）
ハヤサキ　セイゾオ（山口）
コジヤ　ヨシヒロ（那覇）

教師
カネコ　セイコ（普天間）

祭司
オクヤマ　ヨシミ（東京中央）
アオキ　キクコ（東京中央）
ナカダ　チカラ（仙台）
タカハシ　カツトシ（仙台）
カシクラ　ヒトシ（室蘭）
タテノ　ヨシヒサ（群馬）

長老
柳田征史（名古屋）

神権（七月）

神権（六月）

執事
ヒロオカ　ギンイチ（阿倍野）
エンドウ　ダイ（金沢）
カメイ　シュイチ（金沢）
ジンノ　フサキチ（室蘭）
マルオカ　ハルキ（室蘭）
タナベ　トヨハル（西の宮）
コフクダ　フミオ（東京南）
国城　長野（東京西）

教師
青柳　英雄（東京北）
ナカムラ　ヨシヒコ（東京南）
米村　武敏（東京西）
池田　悠行（横浜）
日崎　市郎（横浜）
山田　強（横浜）

祭司
タカギ　アキラ（金沢）
キタガワ　ヤスオ（金沢）
アベ　ハツオ（岡町）
マキセ　ジョウジロ（岡町）
タブチ　ショウジ（岡町）
岩崎　和夫（横浜）
ナカヤマ　タスケ（普天間）

長老
フクヤ　コジ（西の宮）
アマノ　アキラ（仙台）
カネコ　マサトシ（東京中央）

ジョセフ・フィールディング・スミス著

末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粋　34

第三部　オハイオおよびミズーリ時代

第二十章　祝福師の祝福—シオンの陣営

（千八百三十三年—千八百三十四年）

六、暴徒の脅威。　千八百三十四年六月十九日、陣営がミズーリ州リッチモンドを通りすぎようとしていたとき、彼らをもてなして食事をそなえてくれた一人の農夫から次のようなことを知らされた。すなわち彼らのまわりには多くの敵がいてジャクソン郡そのほかの郡からきた暴徒らは、今彼らがクレー郡にいる兄弟たちのところへ着かないうちに道をさえぎろうとしている、と。このことは後になって確認されたのであったが、そのとき陣営の前進は神のみこころによってさえぎられ、その夜はリツル・フィッシングリヴァーとビッグ・フィッシングリヴァーの間に野営しなくてはならなくなった。彼らが野営をしようとしていたとき、五人の男が馬を乗りつけ「お前ら、夜のあけぬうちにくたばってしまうぞ」と言った。そして、レイ郡とクレー郡からきた軍隊はフィッシングリヴァーの渡しのまがりかどでジャクソン郡からの部隊と合流し、この陣営をてっていの的にやっつけることになっている、と言った。

これら五人の男が陣営の中にいて、口ぎたなくののしり復しゅうを誓っているとき、まわりはおそろしい暴風雨が近づいてくる兆候につつまれた。これら五人の男が陣営を立ち去るやいなや、突如暴風雨がおそってきてあらんかぎりの猛威をふるった。巨大な雹が樹木の大枝を断ち切って野営のまわりに散乱させ、強い風の力が樹木を根こそぎにして倒した。大地は鳴りどよめき小川は滔々と流れる

大河に化した。ここにおいて暴徒たちはちりぢりとなって逃げまどった。電光一閃一人の暴徒を地に倒すや、荒れ狂う馬はもう一人の暴徒の手首から先きを振りちぎった。

これを見た暴徒たちはおそれをなして口々に「もしこれがモルモンに味方して戦う神のやり方ならば、わしらは自分の仕事を構っていよう」と言って四散し去った。六月二十一日の朝、スコンス大佐は二人の者を伴って、会員の意向を知るために陣営を訪れた。その時大佐は「私は前に武装した兵の一隊を率い、君らを撃滅せんとする固い決意を以てレー郡のリッチモンドを出発したが、あの暴風雨にはばまれて事を為し得なかった。これを以て私はこの民を守りたもう全能の神の力があることを知る」と言った。予言者がこれらの人々に聖徒らの受けている苦痛を述べたところ、彼らは今一般に広がっている興奮をしずめるために自分らの力を尽してあげよう、と言って陣営を立ち去った。

七、レイモンド判事の提議。 千八百三十四年六月十日、ジョン・エフ・レイモンド判事は明らかに最上の意図を以てアルヂャノン・エス・ギルバートに書簡を寄せ「現在モルモン教徒とジャクソン郡の市民との間に起っている騒動」をしずめるために、六月の十六日リバーティにおいて集りを開きたいと申し送った。これと同時に、同様の通知がジャクソン郡のおもだった人々に送られた。ジョン・コリル長老とエー・エス・ギルバート長老とはその集りに喜んで出ると回答したが、またその中で聖徒らはジャクソン郡にある彼らの土地をいかなる条件でも売らない旨を宣言した。

十六日に判事の提議した集りが開かれた。そこにはジャクソン郡からの代表者が出席していて次のような提議をした。すなわち、

「われわれはジャクソン郡でモルモン教徒が所有している全部の土地と全部の改良工事とを買う。而して上記の土地の価格は受益者でない三人の者が決定する。これがため、十二人のモルモン教徒はその土地と改良工事とを示すためにジャクソン郡に入ることを許される。購入は決定が行われた後三十日以内に為され、評価額の百パーセントが追加される。一方モルモン教徒にも同じ条件でジャクソン郡の市民が所有するすべての土地が提供される」と。この提議はこの処置をとる承認を受けたという十人の者が署名していた。

この提議が朗読された後、ジャクソン委員会の一人サムエル・シー・オーエンスが舌戦を始め、つずいてライリー師が起ち「モルモン教徒はずいぶん長い間クレー郡にいたからもう立ち去らなければならぬ。否、立ち去らせなければならぬ」と宣言した。これを受けて議長のターンハム氏が「われわれは共和主義者らしくしようではないか。われわれは祖国を尊敬し、ジャククソン郡のようにそれを恥かしめないようにしようではないか。モルモン教徒から選挙権をうばったり追いはらったりするなかれ、彼らはもと住んでいた者たちの多くよりも善良な市民である」と言うと、エー・ダブルュ・ドニファン将軍が起って「その通りである。モルモン教徒はすでに武装しているから、もし彼らにして戦かわずんばひきょう者である。彼らには助けにくる兄弟たちがあると聞いて私はうれしく思う。兄弟のためにその命をすてるくらい偉大な愛はない」と言った。

その瞬間、ピストルとナイフがサッとひきぬかれると、誰かが刺されたという叫び声が入口のところで挙った。これを聞くや何事が起ったかと大勢の者がどやどやと走り出て集会は混乱のうちに解散となった。

伝道部扶助協会長メッセージ（ミッションマザー）

ペギー・ヒュイシ・アンダーセン姉妹

アメリカのこのごろは教会の姉妹たちにとってうれしい時であります。もう暑休みもおしまいになって、大ていの家族の旅行も終り、子供たちはまた学校に行きはじめ、お母さんや若い姉妹たちは扶助協会の新しい年度のプログラムにとりかかります。毎週きまった時にお互いの交わりを温めるために教会へ集まり、互いに愛し助け合い、福音の原則と幸福な家庭を育てあげるわざとをもう一度思いかえすことができます。私たちが今扶助協会の新年度に入りますに当って、私はこれが日本の婦人たちにとって、多くの喜びと活動の時期になることができると思うのであります。

扶助協会の会員になって活動をするということは喜びを与えるということであります。千八百四十二年の三月十七日にイリノイ州ノーヴーで最初の扶助協会の集りが閉じられた時、それは本当に喜びの時でありました。この時集った最初の会員たちは閉会の讃美歌に「いざ救いの日を楽しまん」を唱いました。

それには充分理由がありました、というのはその人たちの心の中にあった望みが本当にかなって、神権者の指図で組織をつくり、一団になって教会の仕事を発展させる手助けをし、また貧しくてこまっている人々の重荷をとり去る手助けをすることができるようになったからであります。

予言者の母ルシイ・マック・スミスはこの新しい組織の与えるいろいろな機会のあることをひじょうに喜んで「この制度はよい制度です。私たちはお互いに大切にし合い、お互いに世話をし合い、お互いに教えられて、みんな天国で一しょになることができます」と言いました。

扶助協会とは一つの組織であって、この組織によって教会の婦人たちはその時間とお金と心づかいとを豊かに捧げ、これによって一致協力の精神と、信仰と祈りと、必要な時に教会の愛する姉妹たちの与える助けとを受けることができるのであります。

扶助協会が始まったとき、一致して働らく精神はノーヴーの婦人たちの心を強くうちました。その婦人たちは、現在私たちが望んでいることですが、その時に大きな真理を悟りました。それは、私たちは一人一人としては弱いものであり、自分自身を発表する範囲は限られているけれども、これが団体となればずっと強くなり、個人の発展とほかの人々へ奉仕をする場はかぎりなく大きくなるということであります。この世界に愛と奉仕とを満して、世界をより善い世界にするのが扶助協会の目的であります。私たちは地上に立ってすべての人を導びく燈台の光となりなやみを癒す力にならなくては

なりません。私たちは神権者の指図を受け一団となってこの仕事をいたしますが、扶助協会唯一人一人の働らきが集まり合って全体の働らきとなるのであります。ある婦人が申しましたように「私たちは住むためにより善い世界がいります。そしてより善い世界は私たちと共に始まります」。

私たち人間は一人一人心と頭と手とを持っています。私たちはこの世界をより善い世界にするため、これらのものを愛の道具として使おうではありませんか。ほかの人々のもっている経験は、私たちの生活を善いことのために向ける助けになることがたびたびあります。次に挙げるいくつかの例は、愛の原則を実行するためによく目をつける価値があります。

あるお嬢さんは、はにかみながらその顔をかがやかせて言いました「私、唇を集めにくるおじさんにクッキーをあげましたの。私、ありがとうございますと書いた紙きれと一しょにクッキーを包んで箱に入れてカンの上に置いておきました」。

もう一人の婦人は申しました「私のとなりにことし八十四になる小さなおばあさんが住んでいますの。たった一人で。私はもし顔を合わせると、こんにちはとあいさつをするだけでした。ところが私はそれではいけないと心にきめました。それである日私はおとなりへ少しお菓子をもってゆきました。そうすると、その時おばあさんは病気をしていましたが、私が自分のことを思ってくれたというのでとても喜んで、床の上に起き上って私に接吻をしてくれました。それはほんとにバラの花びらのようにやさしかったので私はおばあさんのかよわいからだを思わず抱きしめてあげましたわ。そのあくる日おばあさんは昏睡状態になり、一週間後に、にこやかなえみを含んだまますっと天へ行ってしまいました」。

まだ若いのに離婚したある女の人は次のお話をしました。「私はそれまで誰にさしあげるものも持っていないと思っていましたが、ある日のこと、私は共同の洗濯室で若いお母さんたちが洗濯仕事をしているのをじっと見ていました。赤ちゃんたちがその足もとでよちよちあるいたり、ころんだりしていました。私はそのお母さんの一人にむかって、あんたが洗濯しているうちに赤ちゃんを見てあげてもいいと聞きました。するとそのお母さんはほんとに私の首にかおりついて感謝をしましたわ。今までに私はもう何十人という赤ちゃんを見てやっています。私はおはなしをしてやり、きずに接吻をしてやっています。私はそれが好きなんです」。

もう一人の女の人は次のように言いました「私、時々知っているお友だちに電話をかけて、あなたが好きと言うんですよ。人はそれを知らないですが、同じように、もしも誰かがいつかたったそれだけ言うために私に電話をかけてくれたとしたら、私はとても嬉しいでしょう」。

また次のような経験について考えてみて下さい「私の家の近所に古い家が何軒かあってそれがアパートになっているんです。その中に年をとった女の人がたくさん住んでます。私はパーティーを開いてこの人たちをみな招待することにきめました。それで一軒一軒たずねて、一人一人にきて下さいと言って歩きました。ある年よりの女の人はころんで足をくじいていましたが、パーティーまでにはきっとなおってまいりますと私に言いました。その通りこの人はよくなって出席しました。そのアパートの人々はみんな来て楽しい時を過ごしました。この世界にはみよりのない年よりの人たちや子供た

ちがいっぱい居ります。これらの人々に私たちは気をつけて大切にしてあげることが必要です」。

ある若いお母さんがまた次のように言いました「私は今日新しいことをやってみました。私たちは家族の間で自分の気持ちを積極的に表わすことがありませんでしたが、けさ目が覚めたとき、私は夫に朝の接吻をしてほんとに夫を愛していますと言いました。その時夫の目がどんなにかがやいたか見せたいくらいでした。次に私はそれを私の子供にやってみました。その子はにやっと笑うとはずかしさと嬉しさでまっかになりました。私はもし人々が互いに愛しているならその愛をあらわすはずだと確信します。それでお互いが愛を言葉にあらわして言うとき一日一日が「喜びの儀式」です。私たちの家庭はほかとちがったところです」。

これまで述べたことは、世界中の扶助協会員が現に行っていなくてはならないことであります。一人一人の会員が自分のように隣人を愛せよという「黄金則」を実行して自分をより善くするとき、その会員は自分の属する団体を強め、より善い団体にしているのであります。私たち一人一人は、多くの失望や、損害や悲しみに堪えるように要求されることがあるとしても、ひとりぼっちである必要のある人は、私たちの中に一人もありません。私たちは扶助協会があるので援助が得られます。私は一致協力と愛と信仰に強くならなくてはなりません。まことに予言者ジョセフ・スミスが語ったと言われているように「この教会は、教会の婦人たちがこのように組織されてはじめて完全になった」のであります。それでありますから、もっと善い世界をつくるために、またずっと善い北部極東伝道部の扶助協会をつくるために一しょに働こうではありませんか。

「ジョセフ・スミスの生涯」(一)

序言

始め「母親スミスの自叙伝」と題された「予言者ジョセフ・スミスの生涯」は、予言者の母親であるルシイ・スミスの口伝えをマーサ・ジェーン・ノートン・コレイ夫人が書き役となって誌したものであった。これは大部分母親のルシイ・スミスがその記憶をたどって話したのを書きしるしたのであるが、ルシイはまた予言者の生涯に関係のある歴史上の覚え書もおよぶかぎり利用している。このようにしてつくられた最初の原稿の写しを一部母親ルシイの手もとにとどめておいて、もとの原稿は筆者コレイ夫人がもっていた。コレイ夫人はこの原稿をユタ州に着くまで肌身離さずもっていたが、後にその写しを一部つくり、これをブリガム・ヤング大管長にあずけた。

予言者の母親であるルシイ・スミスは千八百五十五年五月の五日、ノーヴー市の近くで亡くなったが、亡くなるよほど前に母親はその財産のいくぶんかを息子であるウィリヤム・スミスにのこしておいたが、その中に「予言者ジョセフ・スミスの生涯」の原稿があった。ウィリヤム・スミスは予言者の兄弟のうち最後まで生きのこり、千八百九十三年十一月十三日アイオワ州クレイトン郡のオステルドックで亡くなったが、ジョージ・A・スミスが内々言うところによると、この原稿はウィリヤム・スミスの手から、かってミシガン州で教会の会員であったことのあるイサーク・シーンという人の手にわたっていた。

ところで、千八百五十二年オルソン・プラット長老が英国へ伝道に行く途中シーン氏を訪問したときこの原稿を見せられた。プラット長老は何がしかの金を以てこの原稿を買いとり、英国のリヴァプールまでもっていったが、そこでこの原稿を改訂もせず、またブリガム・ヤング大管長や十二使徒会の会員たちに知らせもせず従って承諾も受けることなしに、自分の一存で出版をした。時に千八百五十三年であった。後になってしらべてみると、この原稿には、つくられたときに歴史上の資料と注意してくらべてみなかったことにもとずく多くの間違いがあることがわかった。またプラット長老自らの筆になるはしがきの中にも間違ったところがいくつかあった。中でも、その本の大部分が書かれたときには

まだ予言者が生きていた。そして予言者がその原稿を読んで認可を与えたというところは真実でない。原稿の書かれたのはジョセフ・スミスが殉教をした年の翌年の千八百四十五年であった。こういうことがあったり、そのほか財政上の理由があったりして、千八百六十五年八月二十三日ブリガム・ヤング大管長はこの本の出版に認可を与えぬこととし、発行をすることは禁ぜられた。この本にのっていることばの中にはやや大げさであると考えられるところもあるが、それは母親スミスの年齢や、夫をはじめ四人の息子に先立たれたことや、それらによって記憶力がいくぶんなくなったことを思い合わせると容易にわかることであって、その本のもっている多くの長所は教会の幹部の人々が十分に認めていたところであった。そして幹部の中には一時発行停止の命令を出さねばならぬことを見てひじょうな失望を感じた人が多くあった。

後になって、ブリガム・ヤング大管長の命によって改訂委員会が設けられ、その委員としてジョージ・A・スミスとエライヤス・スミスとが選ばれたが、なかでも後者は予言者の甥であって、予言者の家族のことをよく知っており、教会の歴史に精通していた。この委員はもとの原稿を始めから終りまで注意深く読んで改訂をするように命を受けた。彼らはこの改訂の事業を終りブリガム・ヤング大管長に報告をして、完全に満足したという返事を得た。このようにして改訂を経ただ一つの認証ずみの原稿はジョージ・A・スミス長老の手もとにあったが、千八百七十五年九月一日同長老が亡くなってから間もなく私に寄託され今に至るまで私のところにある。

近ごろになってこれをつぎものとして「インプルーヴメントエラ」にのせようとする問題が考慮され、またY・M・M・I・Aの中央管理会員の中にはこれを出版するがよいという気持ちが一せいにもり上ってきた。そこでこの問題をロレンゾ・スノウ大管長のところへ提出して説明したところ承認を与えた上、その企画に心から賛成すると言われた。

この本を世に公けにすることによって、立派な記録が保存され、また真の母でありイスラエルの英雄である気高い忠実な女性の証詞が永久になくならないのである。この本には予言者の先祖とマック家とスミス家のことがくわしく説明してあるほかに、予言者ジョセフ・スミスの生涯についてほかの本にのっていない興味のある貴い記事がのっている。予言者ジョセフ・スミスとは神のみこころにより神の使いたもう媒ちとして選ばれ、末日の世に神のまことの教会としてたてたもうた「驚ろくべき不思議なわざ」をするための基となる働らきをした人である。

この本を一頁一頁よく読むことによって、老いも若きも利益を受けるのはもちろん面白さを感ずるにちがいないことを信じ、かつその心にまた新しく熱情を吹きこみ、神の偉大なみわざを信ずる信仰をさらに強くするように祈りつつ、この「予言者ジョセフ・スミスの生涯」を読者諸君に推賞する次第である。

千九百一年十月八日　　ジョセフ・F・スミス

はしがき

予言者ジョセフ・スミスの母親ルシイ・マック・スミスの著であるこの本にのっているジョセフ・スミスの伝記は最も美しい物語であるが、それにもかかわらずわが教会の文献の中にみられる最も悲しい物語の一つである。一人の女性が、自分の受けた数々のめぐみ

に対して神に感謝をあらわし、自分の受けた数々の試れんの中と耐え忍ばねばならなかった数々の迫害の中にも神の御手を認めて、これほど誠実に心の思いを述べているものはほかに見られない。これは一つの偉大な真実のクリスチャン生活の記録であって。これからさきはるかな未来にいたるまで、自分の生活の中に霊感と導きとなぐさめとを求めようとする男も女もみな興味を以てくり返しくり返し読むにちがいない。

ジョセフ・スミスの母親スミス夫人は、自分が神の予言者を生んだ母であるということに最も高いほこりと喜びとを抱いていた。彼女は「私は予言者の母でございます」と言うたびごとにいつも喜びを感じていた。自分が予言者の母であるということから得る満足は彼女以外に誰にもわからなかったであろう。それにもかかわらず、この光栄ある特権に対して彼女はひじょうなぎせいを払わねばならなかった。最も痛烈な貧乏と迫害と試れんと困難と悲しみとは彼女がこの世に於てけいけんしなければならぬことであった。

この本の初版は千八百五十三年に英国で出版されたが、前の序言でジョセフ・F・スミス長老が説明された通り、その中に不正確な点がいくつかあったため教会の幹部の中に非難をする人々があったしかしジョセフ・スミスの歴史を話して聞かせたとき、スミス夫人はすでに七十代であったこと、その一生を通じてなみなみならぬ困難と労苦にたえてきたこと、また学問や教育を受けているいとまがほとんどなかったことなどを考えるとき、もし誤りがあったにせよそれは記憶力の上の問題のことで、彼女の愛情に誤りのなかったことに同意しない人は一人もないにちがいない。

ルシイ・マック・スミスが、その大事な息子と、彼が母に教えた教義と、彼がつくった組織とにささげたまごころは黄金のように純粋なまごころであった。末日聖徒イエス・キリスト教会の中に、彼女くらい全身心をささげた忠誠な会員は一人も見当らない。「教会第一の女性」という歴史上の地位は永久に動かぬものと思われる。

この本にのせたスミス夫人の肖像画は、千九百四十二年九月にジョージ・アルバート・スミス大管長が、ジョセフ・スミス（初代）とルシイ・マック・スミスの孫に当る（しかも当時生きていた唯一人の孫）イリノイ州コルチェスターの住人クララ・ヘンデル夫人から手に入れたものであって、こまかい点にいたるまで正確に描写されていると信ぜられる。

今、ジョセフ・スミスの母ルシイ・マック・スミスの語る「ジョセフ・スミスの生涯」の新しい版を、わが教会の会員と世の人々におくるのは、われわれの喜びとするところである。

編集者　プレストン・ニブレイ

（扶助協会用レッスン「文学」、一九六二年十一月用）

扶助協会レッスン

「神学」（千九百十二年十一月の最初の集りに）

第四十二課「善い働らきに従事する」

テキスト「教義と聖約」五十七章五十八〇一—四

目的—主なる神の誡命に従うことには、シオンのために働らくことが含まれていることを示す。

はしがき

千八百三十一年に、予言者ジョセフ・スミスはミズーリ州ジャクソン郡にあるインデペンデスの地をシオンの市もしくは「新エルサルム」を建てるための敷地として指定するという啓示を受けました。これよりはるか昔に主なる神は、末日の代に於て神に忠実な者たちが入ってくる聖なる都は、光りかがやいて、福音を受け入れるように世の民を招くにちがいないと仰せになりました。このシオンの都は「福千年」の時代に「神の王国」をたてるために「救い主」が来りたもうとき、全世界を統治する首都になるにちがいありません。

聖徒たちはシオンの中心地から追い出されましたが、聖徒たちが福音の回復を信じていたことと、もう一つ聖徒たちがその当時要求通り福音を実行する能力に欠けていたことは、ミズーリ州から追い出される迫害の原因となったのであります（第四十一課参照のこと）千八百三十四年に聖徒たちがミズーリ州から追い出された時に何が起っても、その土地について主が結びたもうた約束は将来実現をするはずであります。わが教会の指導者たちは、「新エルサレム」は必らず主のみことばの通りに建つということを知ってその通りいつも教えてきました。ミズーリ事件の近くに使徒の一人であったジョージ・Q・カノン長老はこれらのことに関する聖徒たちの感情を次のように言いあらわしています。西部へ来て二十年後にカノン長老は「われわれは帰って行ってシオンの中心地をたてることを話し会った。それはわれわれ日常の祈りに必らずささげられたことばであった。無数の聖徒の熱望はシオンのあがないの為にサバオツの主（万群の主）の耳へのぼってゆく、すなわち神の目的がすみやかに達せられるように、シオンの中心であるステーキ部がすみやかにたてられ聖徒たちがそなえをしてそこへ戻って行って住む日がすぐに来るようにと。われわれは何故これを望むか。われわれは、イエスが来って聖徒の間に住みたもう勝利の日にそれだけ近づく日の来るときを待ちのぞんでいるからである。われわれは言い表わし得ない感情でその地を待ちのぞんでいる。それは神の都がたつと神御自身の仰せになった地であるからである。その地こそ、「最も老いたる者」であるアダムが再びその子孫を集める場所であり、神の祝福がかれらにくだる場所である……」（説教集「英文」十一〇三三六—三三七参照）。

シオンをたてるには誡命にある通り準備をしなくてはなりません。主はこの啓示（第五十八章）で、千八百三十一年の始めに於てもまた将来に於ても聖徒たちがミズーリに行かねばならぬわけを啓示しておいでなります（第四十一課参照）。今日シオンの都をたてる祝福を実現するには何が必要でありますか。この質問に対する答えはこのレッスンの中にあります。カノン長老は言いました「その日のくる時、われわれは今日のわれわれとひじょうにちがった人になっているはずである。われわれは天に住む人々と交わる準備ができているであろう。とにかく、その準備はイエスのあらわれたもう日のためにひじょうに速やかに進行するであろう。一つの社会が組織され、その社会は天上の社会と同じ型式のものであって、イエスとイエスと共に来る天上の人々が天の雲の中にあらわれるとき、その社会の人々の感情はその変化によって強い打撃を受けることはないであろう。それは地上に一つの社会が組織されていて、その社会をつくっている人々は、完全に平等と言えなくてもあるていど平等に、イエスと天上に住む人々と一しょに会って交わることのできるよう神の啓示によって準備ができているからである」と（説教集「英文」十一〇三三七頁参照）。

「エドワード・パートリッヂ」

私たちは第五十八章に関する考

察を第十四節から始めますが、このところで私たちはエドワード・パートリッヂを思い出します。エドワード・パートリッヂは啓示によって監督に任命され（教義と聖約四十一〇九参照）、神の王国に関することには完全に信頼して任せよと言われました。この勧告は今日神と聖約を結んでいるすべての会員にも適用されます。この世の物に重きをおいて神の目的を排斥するのは「不信仰と心の暗い」状態であります（教義と聖約五十八〇十五、全註釈「英文」三三八—三三九頁参照）。

パートリッヂ監督の義務は彼自身が知っていました。パートリッヂ監督と彼のあとをつぐ監督は聖徒の中の判事となるはずでした。パートリッヂ監督は、昔イスラエル人に為されたように（出エジプト記十八〇十三参照）聖徒の嗣業すなわち土地を定めるはずでありました。

この監督は「正しき人々の証詞と彼の副監督らの助けとにより、神の予言者らの与えたる王国の律法を以てその民を審く」のでありました（教義と聖約五十八〇十八参照）。主なる神を代表する者、この場合監督が判事としての地位を理解するためには、教会の律法（第四十二章）を道徳の道しるべとし、教会員の福祉のために計画をたてなくてはなりません。いかなる監督も自分が「支配者」であると考えてはならないのでありまして、「神の王国」の支配者はイエス・キリスト一人であります。「神の王国」で役をつとめる者はすなわちしもべたちであります（教義と聖約五十八〇二十参照）。

「国の法律」

神の聖徒たちはキリストが支配者であることを受け入れて、神が任命なさったしもべたちの言葉に従うはずであるばかりでなく、国の法律にも従うはずであります。「何人もその国の律法を破ることなかれ。そは神の律法を守る者はその国の律法を破る要なければなり」（教義と聖約五十八〇二十一参照）。

律法を守るという原則は「この神権時代」に始まったことではありません。秩序と安定があるためには律法に服従する必要があります。昔イスラエルの中には律法を施行した「士師」（さばきつかさ）が幾人もありました。モーセの時代には律法を破った者たちに公平なさばきが与えられるはずでありました（申命記十六〇十八、歴代志略二十三〇四参照）。キリストの時代に於て、ローマの法律は不正に行われていたとはいえ、キリストはローマの法律もユダヤの法律も共に承認なさったということをゼームス・E・タルマッヂ長老は指摘しておられます。税金に納めるはずの金を与える時に行いたもうた一つの奇蹟によって、イエスは国の法律に従えと強調なさいました（「信仰箇条の研究」五四六頁参照）。支配者の権力に反抗する者としてメシヤをわなにかけようとした者にお答えになった有名なことばは「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」というのでした（マタイ伝二十二〇二十一参照）。

使徒たちは、国の法律に従うことは宗教生活を完全に実行するに際して必要であると教えるに当って、師イエス・キリストの模範に従って行動しました（使徒行伝二十三〇一—五、テトス書三〇一、ロマ書十三〇一—七、テモテ前二〇一—三、ペテロ前二〇十三—十七参照）。これらの例は「信仰箇条の研究」五四九—五五二頁を参照して下さい。

「今の神権時代」はどうかといえば、啓示と教会の指導者たちから与えられる指示によって、聖徒たちに伝えることばははつきりしています。すなわち、真の末日聖徒であるためには、神の律法を守ると共に必らず国の法律も守らなくてはなりません。「信仰箇条の第十二条」は誰もよく知っております。

国の法律に従うか否かによってその人のもっている宗教がわかります。タルマッヂ長老の言っておられるように、

「宗教は本来毎日の生活に関することである。宗教は、霊に関することに於ける抽象的信念に関係があると同じほど物質的環境に対する個人の調整と関係がある。人の宗教は、その人のもっている神に関する考えと、その人および他の人々に関する神の目的とを具体的にあらわしているものでなくてはならぬ。それ以下のものは敬神の形態もその力も共にない……

忠誠な市民であるということは、その人の宗教の特徴であると同時にその人の宗教を試験するものである。そして市民の守らねばならぬ義務については、政府が定めた方法によって人民の声によって決めなくてはならない」（モル

モン教の活力」（英文）一八〇―一八一頁参照）。

次のレッスンで、第九十八章と第百一章と律法を守ることに関する聖徒たちの信念についてくわしく考えることにしましょう。

「キリストが統治なさる」

末日聖徒のもっている信仰の中で、ほかときわだっているのは、末日に於てキリストが再臨なさるということを知っていることです。次の聖句は「信仰箇条第十条」に述べてある真理を語っています。「この故に今ある権力に服従し、統治すべき権能をもちてすべての敵を脚下にふみつくる者の統治する時の至るを待つべし」（教義と聖約五十八〇二十二参照）。

「救い主」が権能をもって地上に戻っていらしゃるときに、神の王国がたてられます。そしてキリストの統治が始まるときに、キリストに反抗するすべての敵が支配の下におかれます。神と人間との敵とは、すなわち圧制政治、専制政治、サタンのもつその他の悪であって、人間にとって最後の敵はすなわち「死」であります（コリント前十五〇二十六―二十八参照）。「王の王」が来ますとき、そのほかには一人の王もないにちがいありません（教義と聖約三十八〇二十一―二十二）。

「福千年」のかがやかしい日が来るとき、地上の民は義の律法によって支配されるにちがいありません。そしてすべての人が自由を楽しむにちがいありません。

「末日聖徒は律法を守る者」

一人の末日聖徒も国の法律と福音の律法について誤解しないように、啓示のことばは次のようにつずいています。

「見よ、汝らがわが手より受けたる律法は教会の律法なり。汝らこの意義によりてわが律法を公けに言うべし。見よ、こはわが知恵の存するところなり」（教義と聖約五十八〇二十三参照）。

「すべてのことに命令を受くべきか」

第五十八章の中の次の数節は（二十四―三十三節）、エドワード・パートリッヂとその副監督およびシドニー・ギルバートにむかって、ミズーリに於ける彼らの任務をよくつとめよと命ぜられた啓示であります。以上の兄弟たちに下さった大切な戒めは㈠すべてのことに命令を受けた後働らくようであってはならない㈡自分から進んで働らかなくてはならない㈢彼らは多くの善をする力を内にもっている㈣神の命令のとりけされるときは祝福もなくなる、などであります。以上の聖句をよくしらべてみると、これらの原則は万人にあてはまるものであるから、すべての人がこれらの原則を知ることを主がねがっておいでになることがわかります。

「見よ、われ汝らにすべての事をことごとく命ずるは至当ならず。そはすべての事やむを得ざれば為さざる者は、怠情なり。賢きしもべにあらざればなり。これを以て彼は良き報いを受くることなし」（教義と聖約十九〇三）。

「人間の内に力がある」

「そは人自らのうちに自由の意志ありて己れのことを自ら為す者なればなり。従って人善を為さば決してその報いを失わざらん。されど命令を受くるまでは何事をもなすことなく、疑いの心を以て命令を受けこれを不精不精に守る者は救われず」（教義と聖約五十八〇二十七―二十九）。

人がその隣人に幸福を与える力となる働らきに従うべきは本当のことであります。しかし、私たちの教会だけが人の喜びを増し、同時に将来永遠に幸福を与えることのできるプログラムを行うことを委託されています。この啓示が与えられた時に、聖徒たちはシオンの基を置けと命ぜられました（教義と聖約五十八〇六―七）。このことについての勧告はまた「この神権時代」の始めにも与えられています。「シオンの大事を起してこれを確立せんことを求め、また現に知恵を求むる」ならば、神の国の奥義は開かれて、忠実に努めるなら「永遠の生命」が与えられるでありましょう（教義と聖約六〇六―七参照）。

シオンの大事を起してこれを確立しようとするまことのねがいをもつ勤勉なはたらきは主なる神が受入れたもうところであります。信仰が弱かったり疑いのある心があるときには、怠情という特徴のある微弱な努力があるだけであります。

「これは神のみわざであるか」

世の中には、誠命を守るために、本気でない不充分な努力をしてみたか知れないのに、祝福が受けられないので神の約束は実現しないと信じている人々があります。このような人に、またすべての人にも主は質問をなさいました。

「人間を造りしはわれにあらずや。われわが命に従わざる者を罪なしとせざらんや。主は言う、われ約束してこれを果さざりしことあらんや。われ命を下すに人これに従わずば、われ約束を取消し祝福を与えず。その時人々心の中に言わん。こは主の御業にあらず、主の約束果されざればなりと。されどかくの如き人は禍なるかな。その報いは地の下にひそみ、天よりの報いあらざればなり」（教義と聖約五十八〇三十―三十三）。

すべての末日聖徒のための大切な質問は「私は神の祝福を受ける資格があるほど忠実に誠命を実行しているか」ということばであります。これに反して、私は自分が忠実でないために祝福が受けられないのを、神に向って不平をならべてよいでしょうか。すべての人が学ぶはずのレッスンが次の註釈の中にあります。

「聖徒らは時として義務を尽し神の誠命を守ることを実行しないことがある。しかし、聖徒らは神が忠実な者たちに約束したもうた約束を果して下さることを期待している。そして神が約束を果して下さらないときは不平をならべる。彼らは祈りをおろそかにし、集会に欠席し、「知恵の言葉」を守らず、「什分の一」を惜しむが、病気がおそい来って、暗黒のおそろしい影におおわれると、長老たちの按手によって神がすぐさま助けて下さることを期待する。そして彼らの期待がはずれると、反抗的の精神を抱いて「神の約束が守られていない」と言うが、これに対して神は「その報いは地の下にひそむ」（教義と聖約五十八〇三十三参照）とお答えになるのである。彼らの報いは「地の下」にある報いであって、天上の報いは得られない（「教義と聖約の註釈」三四〇頁参照）。

もしも聖徒たちが「永遠進歩」をうながすための誠命を守る機会をもっていても、誠命を守らないとかまたはその誠命を守れないような状態が出てくるときには、聖徒たちが誠命を守ることができるようになるまで、神のおきては取り消されるか、または中止されることがあります。その一例は前に学んだことのある全財産奉献のおきてのようなものであります（扶助協会誌、一九六〇年十月号参照）。

主なる神さまは、予言者モーセを通じて昔のイスラエル人に「高度の律法」を守らせようとなさいました。ところがイスラエル人たちがこれを受けることをこばんだので、その結果「肉体にかかわる低い律法」すなわちいわゆる「モーセの律法」が与えられました。こうしてイスラエル人はそのときに大きな機会を逸したのであります。

「シオンに関するその上の指示」

この啓示のあとの部分には（第五十八章三十四―六十五節）シオンについてある長老たちと教会の会員に対してとくべつの指示が与えてあります。これらの人々に与えられた勧告のことばは、おなじような誤りを犯さないために、現在でもすべての会員が守らなければならないことばであります。

考察のための質問

(一)将来実現するはずの「新エルサレム」の偉大なこと、およびその場所に関する聖徒たちの期待についてもう一度考えてみなさい。

(二)国の法律に従えという聖句はどこにありますか。

(三)主なる神さまは、なぜ一から十までみな命令をなさいませんか。

(四)人が従事することのできる最も大切な働らきは、シオン建設のための働らきであることを論じなさい。

訪問教師のメッセージ　千九百六十二年十一月第一週

「教義と聖約」にもとずいて実践する真理

メッセージ第四十二

「正しき業を行う者はよき報いを得」（「教義と聖約」五十九〇二十三）

目的―正しい生活を確立する助けとなるとくべつの性質と働らきとを述べる。

「教義と聖約」第五十九章二十三節の聖句の中にはすばらしいことが義しい人々に約束されています。主なる神さまは「正しき業を行う者はよき報いを得、すなわちこの世に在りては平和を得、次の世に在りては永遠の生命を得ん」と言っておいでになります。「正しい」という言葉は聖典の中にひろく使われていて、私たちはみなその意味がわかっていると思っています。それにもかかわらず、私たちがある人を正しい人であると言っているとき、私たちはそれを一般的の意味で考えているでしょうか。私たちは正しいことが成り

立つとくべつの性質または「働らき」がわかっていますか。

もしも私たちが「正しい働らき」をしようとするならば、私たちは「正しい働らき」をするようになるいろいろな性質をどのようにして発達させることができますか。

旧約聖書の詩篇第一章にあるダビデの最初の詩をみると、「正しい人」が何であるかがよく書いてあります。「悪しき者のはかりごとに歩まず。罪びとの道に立たず、あざける者の座にすわらぬ人はさいわいである。このような人は主のおきてを喜び、昼も夜もそのおきてを思う」（詩篇一〇一―二参照）。

また新約聖書にある「山上の垂訓」を見ると、「正しい」ということの特殊な性質がひじょうに簡単明瞭にしるしてあります。それらの性質の中でひときわ大切なものを挙げると、それは愛、柔和、慈悲、きよいこころ、和解、許し、寛容、貞潔、忠実、節操、敬けん、親切、慈善、けんそん、なさけなどであります。以上は何でもみな挙げて言ったのであって、これはかなわないとすぐに思えるかも知れません。それにもかかわらず、もしも私たちが日常の生活で、以上の美徳をできるだけ良心的に実行しようとしているなら、私たちは現在正しい生活という望ましい目標に向って進んでいるのだというなぐさめと自信とを見出すことができます。

「正しい」生活が与える結果を説明しているすぐれた実例がモルモン経のニーファイ第四書の中にあります。「救い主」がニーファイ人を訪問なさって、神のまことの教会をニーファイ人の中におたてになってから、ニーファイ人は約二百年の間「正しい」生活をしました。この二百年くらいの間、ニーファイ人は「かれらの主、かれらの神から受けた誡命に従い……心に愛を保っていたから全国に何らの不和がなかった。またしっと、争闘、暴動、みだらな行い、虚言、人殺し、および何らみだりがわしい行いがなかったから、まことに神が造りたもうたすべての民の中でこの民ほど幸福な民があるはずがなかった。主はこの民の一切の業をめぐみたもうたので、かれらは本当に幸福な民であった」（ニーファイ第四書十二、十五―十六、十八参照）。

国家社会の基礎である個人が正しいときにその国家も社会も強くなります。これは「救い主」がアメリカ大陸においでになってからの二百年がよく証明しています。また現在の状態もこれを証明しています。前と別のニーファイ人の予言者リーハイは「もしも義がないなら幸福もないであろう」（ニーファイ第二書二〇十三参照）と言いました。

私たちは個人として、どのようにしたら「正しい」生活を送って、私たちの生活の中に幸福と平和の基をきずくことができるでしょうか。私たちはもう少し親切を実行することができます。私たちは自分の家族、友人、隣人などに対して一層の愛と思いやりとを示すことができます。私たちは寛容で慈悲深くなることができ、祈りによって、天にまします父なる神さまのみこころをもっと熱心に行おうとすることができます。以上の「正しい」こと、そのほかの「正しい」ことを実行するならば私たちの心はもっと平和になり、もっと楽しくなるにちがいありません。

ジョージ・アルバート・スミス大管長はこの根本的の真理を次のように美しく言いあらわしました「まことに、人間が真に必要とするものは、平安と幸福とおそれのない心をおいてほかにない。主はたびたび言ったことをまたくり返して『義しいことを行えば平安と幸福が得られる』と言っておいでになる」（ブリガム・ヤング大学に於ける講話、一九四九年十二月）。

「仕事会」千九百六十二年十一月第二週

考察その二「末日聖徒の家庭はよく組織されている」（二）

目的―私たちの家庭の価値は、つきり立てた目標に向って働らくことによって知られることを示す。今日は「秘密の座談会」でまず前のレッスンにのっていた「家庭の採点テスト」を簡単に復習しながら考えましょう。

（註。秘密の座談会とは、テーブルを中心にして、あらかじめ指名しておいた会員がほかの人たちにまざってばらばらに席につきます。そして指導者が質問を出すと指名されていたこの「秘密の」会員が説明を加えます。主な点が考えられた後では、この座談会の会員でない聴衆でも討論に加わることができます）。

座談会の会員へ出す質問。

㈠末日聖徒の「家庭の採点テスト」にあらわれている「家庭の価値」とはどういうことですか。

㈡家庭の主婦はなぜ各自の「家庭の価値」をはからねばなりませんか。

㈢「家庭の価値」は、どのようして家族の目標を定めるときの出発点になることができるのですか。

㈣「家庭の価値」を自分で知るためのいろいろな方法について実際的のアイデヤを出して下さい

私たち末日聖徒の「家庭の価値」は自分で知るものであって人から知らせてもらうものではありません。

「家庭の価値」は毎日の活動の一部となり、また各家族の生活の一部にもなります。この「家庭の価値」は私たちの内部に霊の力と、道徳の力と、人間のもっている威厳と、よいものを造り出す力と、新しく発明する力と、生産する力とを強め、家庭生活をさらに満足させます。このような「価値」をもつことによって私たちはほかの人たちの模範になることができます

私たちは自分の目標を定める前に自分の「価値」を知らなくてはなりません。これをどのように実際上に使うかを見てみましょう。もしも、健康があなたにとって大切であるが、あなたは「家庭の採点テスト」にかかげてある健康のテストの全部に対して「然り」と答えることができない、そういうときには健康のテストに出てくるいろいろの項目があなたの目標となります。これと同じように、あなたがテストに出てくる十の「価値」をしらべるときに、そのほかの目標を見つけるにちがいありません。「家庭の支配人」である主婦は、主な「家庭の価値」を頭におきながら、いろいろな目標の中から優先的に到達しなければならないものを挙げることができます。家庭の主婦は、もし一度に一つの目標に到達することに努力を集中するなら、ずっと速く進歩をするにちがいありません。

家庭の主婦は、家庭の人たちがもっと健康でもっと幸福でなくてはならない、そこで今週は食事の時間を毎日経験することのうちで一番楽しい時にするためにできるかぎりのことをしようと決心することができるでしょう。もしも主婦がこのことに努力を集中するならば、その週間のために食事をよく計画し、買物をし、早いところ大部分の用意ができるように仕事を組織立てることは、主婦を忙しさから解放して食卓につく前に一息入れさせることができ、従って主婦は食事をしながら楽しい話をすることについて考えをめぐらす時間をみつけて三度の食事を楽しいおいしいものにすることができるでしょう。このような手ぎわをすっかり身につけるには一週間以上、おそらく一年以上かかるかも知れませんが、もしも家族の全部が協力をする一定のやり方をつくり出すことができるほど長い間力を集中して努力をするなら、自分にとっても家族の者にとっても第二の天性と言えるほどの「きまりきったやり方」をだんだんつくり出すことができましょう。

次の新しい目標は、食事の用意をもっと便利にしようとする主婦の必要から出てくるかも知れません。ある主婦は、自分の台所の食器戸だながほとんど使わない小物で一ぱいになっているので、いつも使う品物がすぐとれる場所に入っていないことを知りました。そこで戸だなの中から全部ひっぱり出してこれを「えんがわ」の上にならべました。そして一つの品物がいるときにはこれをもってきて使い、使ったあとでそれを使った場所におくことにしました。こうして一週間たったあとで見てみると、大部分の物はまだあとにのこっているのでした。使うたびにもってきた品物は、毎日使う品物を貯えておく一層便利な方法をつくり出すために役に立ちました。そこで、ほとんど使わない品物を台所の附近から追放してしまいました。

それから、とくべつな仕事をするための小ぢんまりとした「仕事の中心地帯」をえらび、そこによく使う品物を新しくおくことにしました。「流し」の中心地帯は野菜その他の食物を洗ったり皿を洗ったりする所です、そこで料理道具と最初に「流し」で使う道具とをこの近くに置きました。それから丈夫な板を「流し」の両がわにつけて場所をひろげました。また「流し」の下に磨物を処理する所をつくる計画をし、皿洗いの道具とこれに必要なものと、まず「流し」で処理する食料を入れる場所をつくりました。皿小鉢を「流し」の左側にある食器とだなに入れたのは右から左へ洗って行くからです。以上の一仕事をやり終ったときに、この主婦は、まず最初に

「流し」のところで使う品物を全部「流し」のところにおくということをして、家庭を組織立てる重要な処置を行ったのであります。

その次に、この主婦は「料理の中心地帯」を整理し始めました。ここは食物を料理して配膳をする場所でありますから、そこにある「料理用のかまど」のところでまず使う物をみな置くことにきめました。その品物とは鍋、かま、ふた、皿、小道具、その他であります。その近くに米、麦、醤油、油塩などを貯えました。

そして夫は、いろいろなものをまぜ合したり食物をつくるための第三の「中心地帯」をつくる手助けをしました。ここはすべての食物を煮たり、さましたり、凍らせたりするところです。この主婦はこの場所を「流し」と「冷蔵庫」との間に設け、二つのちがった高さの台をつけることができました。一つの台は立って仕事をするためのものであり、もう一つはこしをかけた位置で仕事をするためのものでありました。そして、まずこの場所で使う食料、料理道具そのほかの設備を全部ここに置きました。

パンや菓子を焼くための器、箱に入れた食料、カンヅメ、そのほか食物をまぜ合わせたりする道具などみんなそれぞれとくべつな場所へおきました。

台所とだなをきちんと片づけるという簡単な仕事をしてみると、この主婦は台所の設計についての知識を知らせてもらう気になりました。そしてこれを近所の普及店と図書館から知らせてもらうことができました。この主婦の熱意は家族のほかの人たちにもうつりました。家族の人たちはまもなく食物をこしらえるために、また台所をもっと人目につく楽しく働けるところにするために、一層仕事がすらすらとゆく「流れ作業」をつくろうとして主婦を手伝っていました。

台所の端のところは子供の遊ぶために与えられ、壁はペンキで塗られ、天井には新しく照明装置がとりつけられ、通風ももっとよくなりました。その上、電気の器具が安全に使えるように配線をもう一度しらべました。台所には、立って働らくためとこしをかけて働らくためとに安楽な高さが設計してありますが、これはみな三つの「台所の中心地帯」の一つ一つでまず使われる道具をどこにおくかを計算しようとするところから始まったのであります。その結果として、今はすべての物にそれに適した場所が与えられ、すべての物は各々の場所に工合よく貯蔵しておくことができました。

討論のための考え

(一)きちんと片ついている家庭の利益について論じなさい。

(二)台所戸だなの引出しと押入れとをきちんと片つけるのに何をすることができますか。もっとよく片つくのに役立つ分割箱、または貯蔵に用いる品々をならべて見せなさい。

(三)風呂場、台所、せんたく場などのちがった場所に全く同じ洗滌剤をおくことの利益を論じなさい。

(四)次の品々を貯えるための提案をしなさい。

(イ)タオル、石けん、その他風呂場に必要な品々。

(ロ)家でせんたくをするために必要な洗滌剤そのほかの品々。

(ハ)子供のおもちゃ。

「社会科学」千九百六十二年十一月第四週

「教会制度の基礎」

第二課　神の律法と人類の幸福

目的―神の律法は神の子供らの利益と幸福のためにつくられたことをはっきりさせる。

私たちはこの前の第一課で、神は御子イエス・キリストを通してこの地上に神聖な律法をおたてになりましたが、この律法を守ることによって人類は神の創造の目的を完全に遂行することができる、ということを考えてみました。人類が完全な者となるために行わなくてならない当然の模範は啓示によって与えられています。聖典を見ると、神は人類の向上（日の栄えまで高く昇ること）と祝福のためにあらゆるものを創造なさったのだという証拠があらわれています。

聖典には、神が御子を通して地上のあらゆるもの、すなわち各種の植物、水中に住むもの地上に住むもの、空中にとぶもののすべてを創造なさったと誌してあります「われ神、すべてこれらを善しと観たり」（モーセの書二〇二十五参照）。

それから神は、神の独り子にむかって「われらに象りてわれらの像の如くにわれら人を造らん」と仰せになりました（モーセの書二〇二十六参照）。そして神は創造

された男と女の二人に万物をつかさどる権能をお与えになりました。「われ神、彼らを祝福して彼らに言いけるは、豊かに生めよふえよ地に充ちよ、地を従わせよ、また海の魚と空の鳥と地の上に動くすべての生物を治めよと」（モーセの書二〇二十八参照）。

万物の創造は「神聖な律法」（神の法則）により人類のために完成されました。「われ主なる神人の観るに美わしきすべての樹を自然に土地より生ぜしめ、かくて人これを観るを得たり」（モーセの書三〇九参照）。それから神はすべての生き物をアダムのところへつれてきて名前をつけさせなさいました。神は「アダムとイヴ」をエデンの園にお置きになりましたが、この園には神がおつくりになったあらゆる有用な善いものがたくさんあって、二人はこれらを自由にすることができましたが、善悪を知る木の実だけは食べてならないと命令なさいました。それでも二人がとって食べるつもりならば、食べるにまかすとお言いになりました。二人はその木の実を食べると心にきめてから、このようにして神の勧告にそむきましたので、地を従がわせすべての生きものを治めるという大きな機会に直面することになりました。しかしながら、地を征服するということだけが人類を創造した主な目的ではありませんでした。人が自分自身に勝つということが、人類の直面した大きな挑戦であったのです。これは、神聖な律法に示してある命令に従って始めてできることでした。

「神の姿かたちの通りに」

私たちは「あの男の子は父親そっくりだ」とよく言います。このとき私たちはその男の子の姿かたちが父親そっくりだと言っているのであります。聖書の中に「救い主」が「われを見し者はわが父を見たるなり」とお言いになっているところを読むとき、私たちは「救い主」の姿かたちが「父なる神」とそっくりであると心に考えます。しかし創世記一〇二十七に「神その像の如くに人をつくりたまえり。すなわち神の像の如くにこれを造りこれを男と女につくりたまえり」とあることばは、実際その通りであるけれども、父なる神の姿かたちにそっくりであるという以上に大きな意義があります。「神の像の如くに」ということばには、あるていど父なる神のもちたもうすべての特性にも関連があるにちがいありません。

神のもちたもう特性の中には㈠神はその創造なさったすべてのものをことごとく知りたもうこと、があります。人間には知識を得る力、反省をする力が与えられて居り、評価と推理の過程を経て、生きるという問題をとりあつかうに当って決心と選択とをします。このようにして、経験と研究の結果人類は「全智」の状態に進歩向上して行くことができます。ジョセフ・スミスは私たちに「人間のもっている「こころ」もしくは「英知」は神自身と同格である」と言っています（「予言者のおしえ」三五三頁参照）。人生はこの「英知」を向上発達させる訓練場になります。この向上発達を支配する法則というのが神のたまわった数々の啓示であります。㈡神が全能であること。人間には、地上において神を代表する者として、神の御名によって事をとり行う権能が委任されてあります。人間が自ら資格のあることを証明するときに神権が授けられます。人間が知識を増し、神権に属する責任を謹しんで果すにつれて、人間は神の力に向ってたえず向上発展してゆくのであります。神権の力によってもろもろの世界が造られ、すなわち組織されて、秩序正しく関連し合って存在するようになりました。それでありますから、神権は人間が義しい状態で向上するほどますます人間に多く委任される創造力であります。㈢神は愛であること。イエスは「汝心をつくし…汝の神を愛すべし」、これが第一の大きな誡めである、「第二もまたこれにひとし『己のごとく汝の隣りを愛すべし』律法の全体と予言者とはこの二つの誡めによるなり」と仰せになりました（マタイ伝二十二〇三十九―四十参照）。

また私たちは、毎日交際している隣り人を愛することができなくて、どうして神を愛し得ようかと教えられています。愛は全宇宙にある最も強い力であります。世界に平和をもたらすことのできる唯一つの力は愛であります。いくら原子爆弾が強力であってもそれは人類に平和を与えることはできません。原子爆弾がつくるものは恐怖と憎悪と偏見ばかりであります。神と隣人とを愛することは、人々が平和に暮し合うことができるように人の心を動かすことのできる唯一つの方法です。㈣神の特

性の中にはもう一つのことが含まれていますが、それは本当に「神の姿かたちの通りに」とは「義しく生きる」ということです。それは個人の日常生活に神の力が働らいていることに関係があります。「義しく生きる」ことは心の中にある神の「みたま」の力が何程あるかを示しています。

以上、神の性格についてきわめて簡単に申しましたが、人間の創造に際して言われた「神の像の如くに」という言葉の中には、姿かたちが似ているというばかりでなく、父なる神のもちたもう多くの特性のすべてに似る可能性があるという意味があると結論することができます。

以上のような特性を持ちこれをあらわすことができるので人間は、神の律法を受けるために好都合な地位にあります。律法そのものは、父なる神が、神の子たちである人間をはげまして最大の能力を発きさせ、これによって完全な生活を営なませる助けを与えたもうている指導であります。人間は神の子たちでありますから、たえず向上して神の位に至る可能性をその中にもっているにちがいありません。

「救いの計画」

私たちは前に、この世界を創造した目的が、それを人類の祝福を受ける場にすることであったと言いました。私たちはまた創造主である神が、霊の子たちである人間に、世界をおさめあらゆる生きものを支配することのできる、神のような特性をお与えになったことを知っています。これは偶然にそうなったのではなくてはっきりと定めた計画の一部分であります。

人間のために神がたてたもうた計画の中には少くとも三つの世界があります。その第一はすなわち「先在の世界」（先の世）であって、私たちはほとんどそれについて知っておりません。しかしながら、人間は先の世に於て父なる神から生れた霊の子であって、これらの霊はかって開かれた天上の大会議に於いて父なる神の提出なさった計画を受け入れました。これによって、霊の子たちは肉身を受けてこの人世の中でいろいろの経験をし、その経験を通して向上発達する機会を得ることができたのであります。これまでにこの地上に生れてきた霊、生れてきている霊、およびこれから生れてくる霊はすべてこの大会議に列しておりました。

神の計画の中にある第二の世界は現在の世界であります。霊の子らが肉身を受けてこの世へくると、彼らは同時に先在の世の記憶をなくしました。霊の子らで居たときの事を知らないままに、人間は自分のなそうとすることを自由にしらべ、評価し、またえらぶのであります。

しかしながら、人間がこの世に来たときの始めから主なる神はそのみこころを人間に知らせておいでになります。教義と聖約の第八十八章五―十四節にはイエス・キリストが神の御子であり「真理の光」であって、すべてのものの中にあり「汝らの立てる地をつくりしその力なり……すべての物の中にある光なり。こはすべてのものに生命を与え、而もすべてのものを支配する律法にして、すなわちすべてのものの中にあり、永遠の内にあり、自らの王座の上にある神の力なり」としてあります。

また第百三十章の二十―二十一節には「そもそも創世の以前より天に於いて定められたる一つの変らざる律法ありてあらゆる祝福はこれに基くなり。すなわち、われら何にても神より祝福を受くる時はこの祝福に基く律法に従うによりて然るなり」としてあります。

第三の世界はすなわち死後の世界であります。この死後の世界についても私たちはほとんど知っていません。しかしながら、近代の予言者たちに与えられた啓示と、聖典にある証詞と、聖霊による証明とは忠実な会員に対して死後の世界は夜の次に朝がくるように確実であると約束をしています。

そこで私たちは救いの計画の第二の世界、すなわちこの世についてもっとよく見てみましょう。これからのレッスンで私たちが主として関心をもつのはこの世の生活についてであります。私たちが心にかけているのは人間の成長発達に働らいている神の律法であります。教義と聖約の第八十八章三十四節には「われまた汝らに告ぐ。およそ律法によりて支配さるる者はまた律法によりて護られ、これによりて全くせられ聖くせらるるなり」としてあります。これによってまた、神の律法の目ざすところは人間の進歩発達であることが証明されるのであります。

「救いの計画の始まり」

前にも申しましたように、神はアダムとイヴをエデンの園にお置

きになりました。この二人は地球に人間を住まわせるように命ぜられました。また禁ぜられた果物をとって食べると死なねばならぬ身にならねばならない、しかし食べるか食べないかは二人にまかすと言われました。

神は自分の霊の子らである人間のことと、地上にある悪の力とを充分承知の上で、堕落から人間を救うために、神の計画の中に、全智を以て一つの準備をしておいでになりました。神の御子であるイエス・キリストは、御父を通して死にうちかつ力をもっておいでになりましたから、世の人の罪のため自らの生命を与えることによって死のなわ目をたち切る責任をおとりになりました。これはイエス自らがお選びになったことであるのに注目することが大切であります。イエスは自ら生命をお与えになりました。誰もイエスから生命を奪ったのではないのであります。最初から、神の計画は人間が幸福を受けるためにつくられました。復活が確かに起ることをはじめ、あらゆるこまかい点に至るまで、人間が最後の目標である日の栄に昇ることを確実にするようにできています。日の栄に昇るとは父なる神が統治したもう王国の一員となることであります。もろもろの律法、原則および組織にあらわれている神の計画と導きの力はみな人間が最大の力を発揮することができるようにはげましを与えています。

「自由意志と永遠の進歩」

救いの計画にあらわれているもう一つの特色は、人間は永遠の進歩をするという約束であり、またその可能性のあることです。神のみこころと一致するために人を強制することは計画のなかにありません。もしも人間が進歩をするはずであったなら、人間は自分の自由意志で、進歩をするように選ばなくてはなりません。人間を強制して救いに入らせるというルシフエルの計画は、人間から成長の機会を奪うものであるとしてしりぞけられました。ルシフエルが強制しようとした力によれば、人間は自分の性格もしくは英知の使用を発達させることはできないでしょう。

ブリガム・ヤング大管長は「人間のもっている権利のもとは何であるか。全能の神は、人間が自分のような独立者になるようにというとくべつな目的をもって人間をつくり、これに独自の自由意志をお与えになった。人間はその創造主に似せてつくられ、創造主は人間に永遠の原則を授け、人間の内に不死不滅をうえつけ、自分の善いと思うところを、すわち自分で選びとるかしりぞけてとらないかを、自由に行う力をお与えになった」（ブリガム・ヤング大管長「ミレニヤル・スター」一八五五年七月五日、第二十巻四十三頁参照）。

人間の進歩はその研究、発見、理解および真理に従うように選びとることに関係があります。これは自由意志に関係があるということであります。それでありますから、人間の決定はこの世に於ける進歩をきめるばかりでなく、神の子として日の栄の最高に昇るかどうかもきめるのであります。

父なる神さまはこれまで一貫して人間に導きをお与えになり、人間が与えられるべきものを思い出させ、生活を支配する諸原則に従うなら最大の喜びと幸福を伴う日の栄の祝福を与えようと言っておいでになります。しかし、人間は自分から進んで努力をしなければなりません。人間は「疑うことなき信仰」をもって求めなくてはなりません（ヤコブ書一〇六参照）。人間は真理と光を固く執って暗黒すなわち悪と戦わなくてはなりません。「この光は神の前よりさし出でて広大なる宇宙に満ち充てり。すなわちこの光はすべての物の中にある光なり。こはすべてのものに生命を与え、而もすべてのものを支配する律法にしてすなわちすべてのものの中にあり、永遠の内にあり、自らの王座の上に在る神の力なり」（教義と聖約八十八〇十二—十三参照）。

神の律法は完成に至る進歩の道であります。この律法は始めから人間に提供されていて、人間が首尾よく最高の栄えに至るようにと神がいつも心にかけておりたもうことを証明しているが、一方に於いて神は善悪を選ぶ自由の結果は人間に負わせておいでになります。

人間が自分の知恵をつかって律法をつくる時は、普通現世的のことをとりあつかっています。その律法は、大てい自分自身および自分の財産が損害を受けたり侵害されたりしないようにするものです。一般に人間は、律法を破ることをさしひかえるように肉体上の罰を課して、自分の考え、民間の

しきたりなどを守るために律法を行うのであります。

これに反して、神の律法は完成に至る導きとして人間に啓示されています。神御自身は復活体をもった完全なお方であって、このような完成に至ることのできるはっきりときめてある律法をふみ行って完全の域に達したお方であります。そして、啓示を通して人間に日の栄の最高に昇る導きとしてはっきり定めてある同じ律法をお与えになっています。

神の律法はひじょうに簡単明瞭であって「今聖徒と呼ばれ、或いは聖徒として呼ばれ得る者にして虚弱なる者、およびすべての聖徒中最も虚弱なる者の能力に適応する」ものであります（教義と聖約八十九〇三参照）。これを釈けば、神は苦痛や病のない健康な肉体を発達させるために健康の法則を下さいました。また、各人が完全になるために精神の発達をするよう訓練として学問の律法をお定めになりました。「人は無知にして救わるること不可能なり」（教義と聖約百三十一〇三参照）。神は人間の交わりを支配し、人間の心に平安を吹きこむことによって人格とすべての人間関係に完全をもたらす愛の法則を人間にお与えになりました。

健康も学問も愛もみな自由な選択によって得られるもので強制によるものでありません。もしも人間が自ら選んで神の律法を無視しても、そこには何ら強制による処罰はありません。しかし、その人が神の律法に従わなかった事実による結果を避けることはできません。

「一人一人の者は健康の法則、自然の道、およびこの世のことにもあれ、霊のことにもあれ、神の命じたもうことに従わねばならぬと同時にすべてこれを破る能力も充分にある。そしてこれらを破った時には律法を破った報いとして罰をその身に受け、一方これらに従ったときには律法を守る生活に伴う特定の祝福と一きわ大きな自由とをいただくのである。

律法に従うのは自由人の習わしである。律法を破る者は律法をおそれる。おそれるのは彼が自由な時に彼を守る律法のためではなくて彼が律法に反対するために自ら剝奪と拘束とを受けるからである」（「信仰箇条の研究」六十八頁参照）。

神の律法は人間にとって光と真理であります。それは絶えぬ進歩の道であり光であって、完全な進歩は自由意志という永遠の原則があらわれることによってのみ達成されるのであり、しかも真理と光と善とを知って選び行い悪をすてることによってのみ達成されるのであります。

参　考

（「教義と聖約」八十八章、百三十一章。「信仰箇条の研究」五、七、十章参照）

考察のための考え

(一)地球を創造するとき神さまはどんな目的でなさいましたか。

(二)創造のときの最大の挑戦である「自分にうちかつこと」はどのようにしてできますか。

(三)「神のかたちの如くに」ということばの中にはどんな意味がありますか。

(四)進歩をさせるために、神の律法はどのように計画をしてありますか。

(五)自由と放縦とのちがいはどこですか。

(六)進歩発達のためにはどのように服従が第一に大切ですか。

GOSPEL IN ENGLISH (Eigo no Fukuin)

The night was cold, the night was dark,
When through the storm there came,
Fighting his way through rain and sleet,
An old man, bent and lame.
"May I come in and spend the night?"
He asked at every door,
"Will you spare me just a crust of bread,
And a bed upon your floor?"

But at every house they told him, "No,
There is nothing we can spare;
Our beds are not for strangers
And our cupboards all are bare."
Then as the lonely stranger
Was about to leave the town,
He stopped to rest upon the steps
Of a cottage small and brown.

There a woman called to him,
"Come in and share our bread,
For in this dark and stormy night
The hungry must be fed.
We have no fancy coverlets,
Just blankets worn and old;
But wrap them close around you,
They'll keep you from the cold."

When morning stole into that house,
The woman looked in vain;
The stranger had departed,
But he left his crooked cane.
When the woman touches it
It turns a brilliant hue,

And by some magic trick it makes
Her every wish come true.
Now all the folks along the street
  Come knocking at the door;
"Tell us, please, about your cane,
And where can we buy more?"
But the woman can not help them;
She knows not whence it came.
The stranger left her no address,
And she does'nt know his name.
Now in that little village,
  You'll never ask in vain
For bed or food on stormy nights,
If you have a crooked cane.

(The Children's Friend, January 1956)

NO SUBSTITUTE

We have substitutes for rubber,
  We have substitutes for silk,
And there are people wearing
  Clothing made from coal or milk;
But there's not a man or woman,
  Not in all the earth a youth
Who will ever, ever, ever
  Find substitutes for truth.
We have substitutes for leather
  And for brick and stone and wood.
Some are worse and some are better,
  And some just about as good;
But from Iceland to Australia,
  And from Dublin to Duluth,
There will never, never, never
  Be a substitute for truth.

(The Children's Friend, Sept., 1956)

(1) Jesus helped create the earth.

Jehovah, or Christ, the first spirit born of God the Father, was the Father's agent in organizing and forming this planet as a suitable place for our mortal probation and in organizing the life upon earth.

(2) The existence of our life here depends on a delicate balance of many great forces such as the earth's rotation, orbit, and mass;

(3) Its balance from the moon; the intensity of heat reaching it from the sun; the element of which it is made, and their variety and proportion in the atmosphere.

(4) Such a safe and comfortable world is a great blessing and demonstration of His love.

(5) Jesus ministered to the prophets.

Scpriptures available to us testify of Christ's guidance (both before and after His mortal life) to peoples and prophets in all nations, through means of inspiration, words, visions, dreams, pillars of fire, clouds, manna, control of the weather, and messengers — both earthly and heavenly.

(6) Jesus endured severe fast and temptations.

Not even the Master was spared from temptations while He was mortal—but He spurned Satan's richest offers during the strain of 40 days without food or water.

(7) Jesus healed the sick.

His compassion brought the blessing of health to the lame and the blind, the leper and the palsied, those afflicted with evil spirits, and others.

(8) Jesus provided a perfect example.

Not only is the daily walk and conversation of the Lord our guide to self-control and security, but His thought fulness and humility in requesting baptism is an enduring landmark to show us the way into His kingdom—the life of greatest happiness.

GOSPEL IN ENGLISH (Eigo no Fukuin)

(1) Among the most imperative needs of every generation are faith, courage, fortitude and tolerance, all of which must be developed and become adequate.
You will need courage, which is more than lack of fear.

(2) Courage is meeting fear with firmness and fortitude.

(3) All who are faint-hearted should read the words with which Henry IV greeted Crillon after an important victory had been won, "Hang yourself brave Crillon, we fought at Arques and you were not there."

(4) Physical and moral courage need not be conspicuous.

(5) Be dauntless in your pursuit of truth and resist all demands for unthinking conformity.

(6) No one would have you become mere tape recorders of other peoples' thoughts. Be modest and teachable and seek to know the truth by study and also by faith.

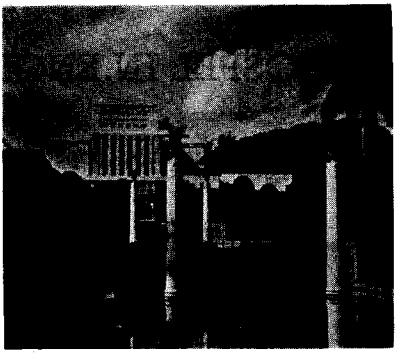
(7) There have been times when progress was haulted by thought control.

(8) Tolerance and truth demand that all be heard and that competing ideas be tested against each other, so that the best, which might not always be your own, can prevail.

(9) Knowledge is most complete and dependable when all points of view are heard.

(10) We are introducing you into a world of restlessness and skepticism, where old things are not only challenged but are disappearing; but into a world of miraculous achievement, undreamed of accomplishment and terrifying power.

(11) "A new world was born when Einstein's theory of relativity put us on the track of atomic energy and made atomic annihilation possible," said David Sarnoff.



神殿をたずねて（10）

ハワイ神殿

一九一九年十一月二十七日の感謝祭の日、ハワイ、ライエにある神殿はヒーバー・J・グラント大管長によって献堂され、一二三九名の人たちがこの献堂式に参列した。これはアメリカ大陸以外の地に建造された最初の神殿で、太平洋上にある多くの島々に、住む聖徒たちのために建てられたものである。ハワイ神殿の敷地は一九一五年六月一日ジョセフ・F・スミス大管長によって奉献された。

編集後記

青々と繁って夏の暑さをやわらげていてくれた樹も、葉を一枚一枚と落しています。これから訪れる秋、冬への準備なのでしょう。この一見なにげない変化は、私たちに一体なにを教えていてくれるのでしょうか。

さて、今月号、新しい企画による記事が多く登場しております。

◆「信仰講話」、信仰の本質を説き明す講話は佐藤兄弟の訳でしばらくの間続けられる予定です。

◆別の方向から初歩的に信仰を説く「求道者への手紙」も期待されます。一方は会員たちに一方は求道者の方々にと、二つの方向から説くこの記事がみなさんの信仰生活の一助となるように願っております。

◆また扶助協会の文学レッスンが新たに登場、広く会員に読んでいただけるように、テキストとしてでなく、連載読み物の形式で載せていきます。ただ扶助協会のレッスンとして活用されるのでなく、広く読まれるように希望しております。

◆聖研の記事は中央支部の佐藤泰生兄弟にお願いしました。この記事をキッカケに各支部で聖研活動が盛んになるようにしたいもの、どうかその記事を、編集部まで送ってください。

◆「練習の歌」今月は執筆者の都合で休載、来月はクリスマスの歌のレッスンがあります

◆値上を機会に本の体裁を変えてみました。いかがでしょうか。九月号の数字の赤い色がイヤだとか、ローマ字は取った方がいいとか色々と意見がありますが、あなたの考えは？意見をお聞かせ下さい。

◆原稿募集

投稿大いに歓迎します。記事の内容が非常に高くなって来ておりますので、自分自身一人よがりの意見でなく、多くみんなで考えようとする記事、共に意見の交換などができる記事を送って下さい。

西支部内「聖徒の道編集部」まで。

カット絵とか写真の原稿も募集します。あなたの腕をここでみせてください。

カット、黒白、キャビネ以上。

写真、黒白、キャビネ以上。

◆ある投書者が編集後記の無用論を説かれました。書いている本人も、こんなめんどうな原稿、と思って書いていますが、なにか妙案はないものでしょうか。（小林）

月刊「聖徒の道」第六巻第八号
一九六二年十月一日発行
実価　一カ年　九一二円〒共
　　半カ年　四五六円〒共
　　一部　七十円
編集兼発行人　ダワエン・H・アンダーセン
発行所　東京都港区麻布広尾町十四
　　末日聖徒イエス・キリスト教会
　　北部極東伝道部

図書案内

教義と聖約
高価なる真珠
モルモン経　上質革製合本……1100円

教義と聖約
高価なる真珠　合本……300円

モルモン経（新訳）……200円
信仰箇条の研究……330円
モルモンとは？（新版）……150円
完成への道……200円
初等協会教科書……150円
総合聖句の手引……150円
日本系図探究要覧……100円
アロン神権者用学科課程……150円
メルケゼデク神権、教師と生徒用
「モルモン経の読み方の手引」……200円
ナザレのイエス……100円
正しい日本史……100円
家督権の祝福……100円
扶助協会手引……50円
求道者教育法……120円

日曜学校用

宗教と生活Ⅱ……150円
回復された神の教会……100円
福音の実践……150円
聖典中の指導者……150円
我等の標準聖典……200円
古代の使徒……150円
福音の紹介……200円
シオン山の救い手たち……200円
教義と聖約の教え……200円

MIA用

生活の目標……150円
モルモン経研究ガイド……100円
MIA・エンサイン・ローレルの手引……150円
演説が上手になる法……150円

讃美歌及び歌集

末日聖徒讃美歌（新版）……400円
子等は歌う……100円
レクリェーション歌集……400円

……注文は各支部長へ……

支部所在地

北海道地方部

旭川　旭川市八条五丁目
MIA集会場　旭川公会堂
室蘭　室蘭市幸町八九
電話（七〇五四）
小樽　小樽市富岡町一ノ三五
電話（二—八二二四）
札幌　札幌市北二条西二四丁目

東中央地方部

群馬　高崎市並榎町二七五
甲府　甲府市山田町六三
松本　松本市同心町六一二
新潟　新潟市中大畑町五五七　金井方
電話（二—八六六〇）
仙台　仙台市光禅寺通り二八
電話（五—〇八九七）
東京中央　東京都渋谷区八幡通一ノ三四
電話（四〇八—三三〇七）
東京北　東京都豊島区高田本町二ノ一四八七
集会場　日曜学校　武蔵野ドレメ
MIA　徳川生物研究所
東京東支部　東京都江戸川区小岩町四—一七五〇
東京南　東京都大田区南千束町二四九
電話（七八二—六一三一）
東京西　東京都港区青山北町六ノ三四
電話（四〇二—四〇一〇）
山形　山形市八日市八五〇
横浜　横浜市港北区篠原町二九
電話（四九—八七七二）

西中央地方部

阿倍野　大阪市阿倍野区阪南町中一ノ三八
福岡　福岡市東薬院二ノ四〇
広島　広島市古田町古江四〇〇ノ三
電話（三—六一二五）
金沢　金沢市成瀬町二ノ四　野田方
集会場　農業センター
京都　京都市左京区松ケ崎桜木町一四
名古屋　名古屋市昭和区北山町三ノ四一
電話（七三—四二一〇）
西ノ宮　兵庫県西ノ宮市仁川町四ノ五四
電話（五—〇四二一）
岡町　大阪府豊中市岡町北二ノ一八
岡山　岡山市浜字下六ノ坪五五三ノ四
三ノ宮　神戸市灘区篠原本町四ノ三五
電話（八六—二六〇二）
柳井　山口県柳井市今市三九一

沖縄地方部

普天間　沖縄宣野湾村野嵩区三二八
那覇　沖縄那覇市松尾区一三九

聖徒の道
一九五八年三月十七日　第三種郵便物認可第六巻第十号
振替口座東京七六二二六番
発行人　ダワエン・N・アンダーセン
編集人
発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会　北部極東伝道部　東京都港区麻布広尾町十四